

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

キプシギスの家畜の分類と個体識別についての覚書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小馬, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003636

キプシギスの家畜の分類と個体識別 についての覚書

小 馬 徹*

はじめに	応
1. 動物の分類と「家畜」の概念	2) 個体名を付与する時期と、その歴史的变化
1) 動物の分類におけるウシ、ヤギ・ヒツジの位置	3) 獣の <i>iitoondo</i> による分類と個体名の付与
2) 家畜あるいは <i>ga</i> の動物	
2. ウシ、ヤギ・ヒツジの性と成熟段階による分類	4. ウシ、ヤギ・ヒツジの個体言及と個体名
1) <i>leta</i> (ウシ)	1) ウシの個体名付与の一般的傾向
2) <i>artet</i> (ヤギ・ヒツジ)	2) 同一牛群における個体名の重複をめぐって
3. ウシ、ヤギ・ヒツジの個体への言及	3) 個体言及の諸レヴェル
1) 家畜の毛色および色模様の発現への対	おわりに

はじめに

本論稿の目的は、ささやかなものである。それは、南西ケニアの高原地帯で、伝統的に多少の農耕も行いながら、牛を諸価値の中核とし、ウシと共に生きて来たカレンジン語系の民族であるキプシギスの人々が、どのように家畜を分類しているか、また家畜、特にウシの各個体をいかに識別しているかを概述し、東部アフリカ牧畜民社会の比較研究のために小さな資料を提供することである。

キプシギスは、リフト・バレー州のケリチョ県を中心に住み、今日、その人口は100万人に達すると推定されるカレンジン語系最大の民族である。伝統的な政治構造は無頭的で、200を超える外婚的な父系氏族は地域に集住せず、様々な氏族員の数十の家族から成る近隣集団が、最大の社会単位として、法機能を担っている。円環式の年齢組体系と年齢階梯体系の複合体系も重要な社会組織である。ほぼ赤道直下にありなが

* 大分大学教育学部

ら、1800メートル前後の標高と約1800ミリメートルの年間降雨量に恵まれたケリチョ県では、1930年代からトウモロコシ栽培が普及し、今日では、北部・中部を中心として茶の栽培も盛んである。しかし、筆者の主な調査地である南西部では、茶は栽培されていないし、トウモロコシも自給的に栽培される程度で、人々の生活は依然としてウシの飼養に大きく依存している。

1. 動物の分類と「家畜」の概念

1) 動物の分類におけるウシ、ヤギ・ヒツジの位置

キプシギスの人々自身が、動物をどのように分類しているかを組織立てて語ることはない。表1に示した分類は、筆者が、キプシギスの人々の言語生活に則して導き出した仮説である。なお、各項の名詞は、単数定形、単数不定形、複数定形、複数不定形——後二者はカッコ内——の順で示してある。

動物のこの分類体系は、キプシギスが認知する世界の分節的な下位分類の体系に基いていると考えられる。そこで、世界の下位分類の概念図およびそれと動物の分類の対応を図1に示してみる。

世界は、まず *barak* (上) と *ng'wony* (下) とに分けられ、*ng'wony* はさらに *timin*

表1 動物の分類

a. <i>chiito</i> / <i>chii</i> (pl. <i>biik</i> / <i>biich</i>)	: ヒト
b. <i>teta</i> / <i>tany</i> (pl. <i>tuga</i> / <i>tich</i>)	: ウシ
c. <i>artet</i> / <i>ara</i> (pl. <i>nego</i> / <i>no</i>)	: ヤギ・ヒツジ
d. <i>tiondo</i> / <i>tiony</i> (pl. <i>tióngik</i> / <i>tióngin</i>)	: 野生陸棲動物
e. <i>tariitiet</i> / <i>tariit</i> (pl. <i>tariitik</i> / <i>tariit</i>)	: トリ
f. <i>njiriyot</i> / <i>njiriyo</i> (pl. <i>njirenik</i> / <i>njiren</i>)	: ウオ
g. <i>kit</i> / <i>kiy</i> (pl. <i>tuguk</i> / <i>tugun</i>)	: その他一切

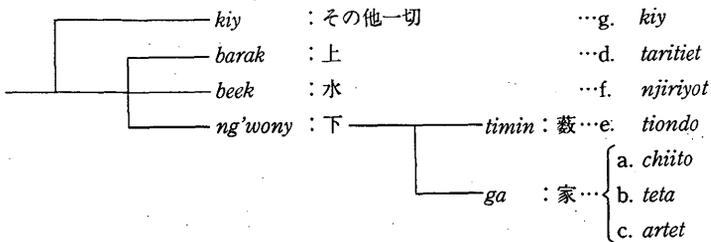


図1 世界の分類と動物の分類

(藪)と *ga* (家) に二分される。 *barak* (上) に住む動物が *e. taritiet* (トリ) である。 *ng'wony* (下) の *timin* (藪) に住むのが *d. tiondo* (野生陸棲動物) であり、その *ga* (家) に住むのが *a. chiito* (ヒト), *b. teta* (ウシ) および *c. artet* (ヤギ・ヒツジ) である。

キプシギスの考え方によれば、キプシギスの土地では、河川も池も概して季節的なものである。 *ainet* というキプシギス語は、川、沼、池、泉、さらには川の季節的な変化の諸相の全てを意味領域に含んでいる。水は、雨として *barak* (上) からもたらされ *ng'wony* (下) に溜るけれども、やがて *barak* に戻ると考えられている [小馬 1983: 38-39; KOMMA 1981: 106-107]。従って、*beek* (水) は、*barak* (上) や *ng'wony* (下) のような固有の領域というよりは、むしろ *barak* と *ng'wony* との境界的領域であり、そこに住むものが *f. njiriyot* (ウオ) である。

世界のこれ以外の領域は、剰余カテゴリーとしての *kiy* となる。 *kiy* の意味領域は、i) もの (thing) と、ii) 一切もの (anything) を包摂している。 *kiy* は、いわば、日本語の古典的な語感としての「もの」——例えば、物の怪などの「もの」——に近い。昆虫や蜘蛛、サソリなどは、*kiy* の領域に属するものと考えられており、またそれら自体も *kiy* と呼ばれ、このカテゴリーに飲み込まれる。すなわち、*kiy* は、不定形の万有 (anything) であり、それゆえに、動物に限らず、明確なカテゴリー化によって世界から刻み出されていない一切のものを飲み込んで非差異化する、認識上あるいは分類上のブラック・ホールとなっているのである。

2) 家畜あるいは *ga* の動物

キプシギス語には、本来「家畜」あるいは *domestic animals* という概念が存在しない。上に述べた通り *teta* (ウシ) は *teta* として、また *artet* は *artet* として独立のカテゴリーであり、両者を包含する上位概念は存在しない。日本的ないし西欧的な観点からすれば、今日ではキプシギスの人々もロバ、犬、猫、鶏を家畜ないし *domestic animals* として飼っていると言える。だが、キプシギス語では、これらすべての動物が *d. tiondo* にあたる。

ただし、近代的な学校教育を受けた若い世代は、必要に迫られれば、*domestic animals* と *wild animals* の翻訳語として、それぞれ *tiongik chekigibai* (飼養される〔野生〕陸棲動物) と *tiongik* (野生陸棲動物) をあてる場合がある。ここで注目しなければならないのは、世界の *ng'wony* (下) 領域を二分する下位領域である *ga* (家) と *timin* (藪) の意味論的対立が *domestic* と *wild* の意味対立の近似値として援用されていない事実である。これからも判る通り、キプシギスの *teta* (ウシ) および *artet* (ヤギ・ヒ

ツジ) の概念と「家畜」あるいは“domestic animals” の概念との親和性はかなり希薄である。

“ga: timin” という意味対立を仮りに援用しようとすれば, “domestic animals: wild animals:: tiondap ga (家の〔野生〕陸棲動物): tiondap timin (藪の〔野生〕陸棲動物)” という対立図式ができるであろう。本来 *tiondo* (野生陸棲動物) という語は, 世界の低位領域である *timin* と対応し, それと不可分に結びついている。だから *tiondap timin* (藪の〔野生〕陸棲動物) という語は, *tiondo* 本来の属性を不必要に強調しているにすぎない。一方, *tiondap ga* (家の〔野生〕陸棲動物) という語は, この造語それ自体の中に *timin* (藪) 対 *ga* (家) という調停不能な矛盾・対立を含み込んでしまうことになる。このような理由から, キプシギスの人々が domestic animals: wild animals の対立の表示に *ga: timin* の対立を援用することはあり得ないのである。

tiondo chekigibai (飼養される〔野生〕陸棲動物) には, ウシ, ヤギ, ヒツジに加えて鶏が含まれることもあるものの, ロバ, 犬, 猫はむしろ対立項の *tiondo* (野生陸棲動物) に分類されるのが普通である。

キプシギスの人々には, 去勢ウシを駄用に用いる伝統が無く, 植民地化以前からロバを駄獣として用いて来た。1930年代には, 去勢ウシを犁耕に用いる慣行が急速に広がった。しかしながら, 今日でも去勢牛を駄用に使役することは, ほとんど行われていない。それにもかかわらず, キプシギスの人々は, 現在もロバを好まない。かつて, ロバを駄獣として用いていたのは, 主として予言者の氏族 (タライ氏族) や氏族を持たなかった鍛冶師達など特別の人達であった。その理由は, 「藪のロバ」 (*sigirietap tim [-in]*) と呼ばれるシマウマの体色 (*iitoondo*) が宗教上のスティグマとなっている *samoi* (白黒の縞模様) であるからであり, ロバ (*sigiriet*) は, ウシやヤギ・ヒツジの食糧である牧草を駄目にすると考えられて来た。ロバが死ぬと, 土地が豊かにあった時代には, その地点から半径数キロメートル圏に住んでいる者は, たちどころに他所へ移住したものだと言われている。

猫は, スワヒリ語 (*paka*) や英語 (*pussy*) を語源とする *paket* ないしは *pusit* または *cheusit* の語で呼ばれていることから判る通り, 家庭で飼われるようになったのは, 比較的最近のことらしい。しかし, ヒトとの関係は, 勝手に家にやって来て住みついてしまう猫を, ヒトがあえて拒まないという消極的な結び付きでしかない。

犬 (*ng'okto*) は番犬として広く飼われているし, キプシギスの先住民である狩猟採集民族オグェック (ンドロボ) に出自を持つ氏族の間では, 大切な財産であると考えられてきた。それにもかかわらず, そのような氏族の一つであるカバラングウェック

氏族は、自分達の犬を *chesoigei*, すなわち「勝手にやって来て、住みついた者」と呼び習わしている。——ちなみに、*chesoigei* の女性接頭辞 (*chep-*) を男性接頭辞 (*kip-*) に置き換えた *kipsoigei* は、キプシギス語と同じくカレンジン諸語の一つであるケイヨ語で、犬を意味している [MASSAM 1927: 170]。この事実が端的に示している通り、犬は、ウシやヤギ・ヒツジのように、ヒトが愛情を注ぎ、万端の世話を焼いてやるべき対象とは考えられていない。犬 (*ng'okto*) は、人糞まで争って食う、利己的な (*ng'ok*) 獣であると蔑まれる側面があり、その名称は、罪 (*ng'okisto*) と語幹を共にしている。

猫も犬も、ロバとは異って、繫がれることが無く、時々勝手に *limin* (藪) に帰っては、また何時の間にか *ga* (家) に戻って来ている動物だと言われている。

2. ウシ、ヤギ・ヒツジの性と成熟段階による分類

1) *teta* (ウシ)

ウシは、約3歳になるまでは、基本的には、性を無視して成熟段階に応じて分類される。キプシギスは、ウシの妊娠期間がヒトの場合と同様に9カ月であると考えている。出生から、生後4～5カ月目に離乳されるまでのウシを *moita* (pl. *moek*, 新生仔) と呼ぶ。*moita* は、おおざっぱに、*moita neming'in* (pl. *moek chemengech*, 小さな新生仔), *moita neo* (pl. *moek cheech*, 大きな新生仔) と呼んで、成長段階が区別される。離乳直後から、雄獣が去勢される時期にあたる生後6～7カ月目頃までのウシを *kiptoiyot* (pl. *kiptoiik*, 小若仔), その後約3歳までを *barnotiyot* (pl. *barnotik*, 若仔) と呼ぶ。離乳をキプシギス語で *eeta kochuchun*, すなわち「授乳を拒む」と表現するが、*toiyot* とは「異った」あるいは「分離した」という意味であり、*kiptoiyot* (小若仔) とは、まさに離乳したウシの意味である。

ここまでの段階では、ウシの性を区別するためには、それぞれの成熟段階のカテゴリーを示す語の直後に、雄であれば *ne kirgit* (pl. *che kirgik*), 雌であれば *ne korgot* (pl. *che korsiek*) という形容詞句を付け加える。*kirgit* は、後で詳しく論じるが、種雄を意味している。他方、*korgot* は雌獣および女性を意味する。この意味での *kirgit* と *korgot* を異性の中で口にするとは、異性に対するひどい侮蔑であるとされるので、その場合は、代りに *bo sang'* (*sang'* に属する) と *bo ko* (*ko* に属する) という形容詞句を用いる。*sang'* は、ホームステッド内の屋外空間、*ko*[-t] は家屋であり、この場合、それぞれが男性と女性を象徴している。会話者が同性で、近くに異性がない場合には、*kirgit* と *korgot* を用いるが、代りに *bo karna* と *bo korgo* が対で用いられること

もある。*korgo* は *korgot* (雌, 女性) の不定形である。一方, *karna* とは金属, すなわち武器であり, 男性を象徴している。なお, これらの用語は, そのままの仕方でヒトの性別にも適用されている。

去勢雄は, *ne eito* (pl. *che eiik*) を付加して区別する。雄ウシを去勢する方法が二つある。一つは, まず陰ノウをできるだけ下方へ引き降すと共に睪丸をできるだけ高く押しあげながら陰ノウの末端を小さく切り取って穴をあけ, 次いで徐々に睪丸を引き降して来てこの穴から引き出し, 精索を切断して睪丸を摘出するものである。この際, 出血は極めて微量であり, 陰ノウの開口部分は親指と人差指でつまんで両側から押し付けるだけで, 縫合しない。もう一つの方法は, 睪丸をできるだけ低く押し下げておいて, 陰ノウ精索部の裏側に台木をあて, その上からこん棒で強打して精索を叩きつぶす方法である。ただし, 筆者は, 後者を実見していない。去勢雄は, 3歳位からは, 一生を通じて *eito* (pl. *eiik*) と呼ばれる。

種ウシは, 約3歳で *unwet* (pl. *unwok* 若雄) となり, さらに成熟すると *kirgit* (pl. *kirgik*, 種雄) と呼ばれるようになる。その遷移期は必ずしも明確ではないが, *unwet* が, 一つの牛群の主たる種ウシになる時期が目安の一つになっているようだ——ただし, 一つの牛群に生殖能力のある複数の種ウシを含むことは, ごく稀である。*kirgit* という語の意味領域には, 種ウシばかりでなく成熟した雄獣一般も包摂されるので, 特にウシであることを断る必要が生じれば, *kirgitap tuga* (pl. *kirgikap tuga*) と呼ぶ。

雌ウシの場合, 約3歳に達してから初産までは *roryyat* (pl. *rorwek*, 未産雌), 初産後は *twoteiwot* (pl. *twoteinik*, 経産雌), 第3子の出産から閉経までを *iywoget* (pl. *iywogetik*, 多産雌), 閉経後を *cherakanet* (pl. *cheragonok*, 老雌) と呼び分けて, 最も精細

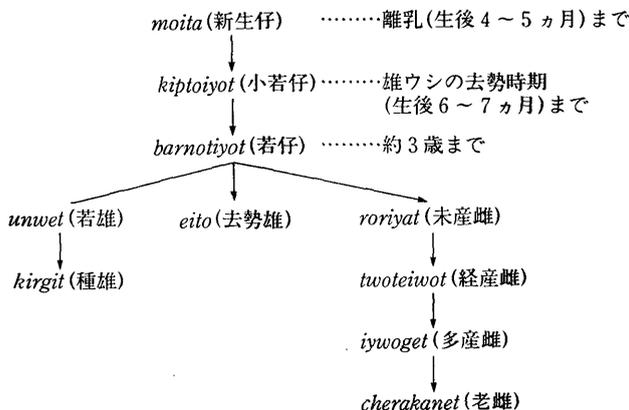


図2 ウシの性と成熟段階による分類

に成長段階を区別する。なお、今日、個体名を与えられるのは、初産後である。もっとも、日常的には *twoteiwot* (経産雌) の概念は多用されず、かつてはそれを *roriyat* (未産雌) に包摂したが、今日では *iywoget* (多産雌) に包摂している。なお、この変化は、ヒトの婚姻慣行、特に婚入した女性が夫の氏族へ徐々に編入されて行く過程の歴史的な変化と相関的であるが、この点は、第2章第2節で論じたい。

また、成熟した仔ウシを意味する *barnotiyot* (若仔) も、日常的には必ずしも多用されていない。若い雄ウシの去勢期に当る生後6～7カ月の段階から、性に従って仔ウシをすでに *unwet* (若雄)、*eito* (去勢雄)、*roriyat* (未産雌) に分類する方が、むしろ一般的であると言えることができるかも知れない。

ここで、ウシの性と成熟段階による分類を図2にまとめて示しておこう。

2) *artet* (ヤギ・ヒツジ)

artet (単数定形 *artet*, 単数不定形 *ara*, 複数定形 *nego*, 複数不定形 *no*) とは、ヤギ (単数定形 *ng'ororiyet*, 単数不定形 *ng'oror*, 複数定形 *ng'ororik*, 複数不定形 *ng'ororio*) とヒツジ (単数定形 *kechiriyet*, 単数不定形 *kechiriyo*, 複数定形 *kechirik*, 複数不定形 *kechir*) を不可分なものとして結び合せた独特のカテゴリーである。今日でも、ある世帯のヤギ・ヒツジは、同世帯のウシと合わせて一つの家畜群を構成することはもちろんないが、ヤギとヒツジは常に同一の家畜群として管理されている。植民地化前は、ウシとヤギ・ヒツジの分離とヤギ・ヒツジの統合は、はるかに明確であった。当時ウシを飼養する少年層とそれを警護する戦士層は、比較的標高が低い地域 (*soin*) に牛牧キャンプを作り、牧草と水と塩土を求めて点々と移り住んだ。その他の人々は、そこから半日ないし一日行程の高所 (*masop*) に、牛牧キャンプよりもずっと定住的な散居村状の近隣集団を作り、そこで女性が雑穀の焼畑耕作に、子供達がヤギ・ヒツジの飼養に携っていた。こよような牧畜慣行から、ヤギとヒツジを一挙に意味する *artet* という概念が形成されたのであろうと推測される。

artet の性別と成熟段階による分類は、ウシに比べると、かなり単純である。幼獣は、すべてが *arwet* (pl. *arek*) と呼ばれる——ここでは、単数定形および複数定形のみを示したが、以下も特に必要が無い限り同様の取り扱いをする。なお、*arwet* という単語は、ウシの分類用語を準用する少数の大型獣は別にして、獣ばかりでなくほとんどすべての *tiondo* (野生陸棲動物) および昆虫などの *kiy* (一切の動物) の幼獣・幼生をも意味領域に含んでいる。その場合には *arwet* の後に動物名を付して用いるのが普通である。*arwet* を単独で用いれば、たいていは、ヤギかヒツジの幼獣を意味する。

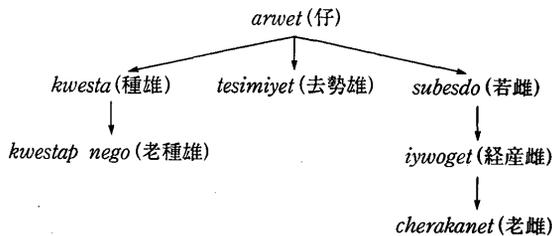
特にヤギかヒツジであると特定したい時には、「ヤギの」または「ヒツジの」を意味する形容詞句を *arwet* に付け加えて、*arwetap ng'oror* (pl. *arekap ng'ororiyo*), *arwetap kechiriyo* (pl. *arwekap kechir*) とする。

雄ヤギは、成獣になると、*kwesta* (pl. *kwesik*) と呼ばれるが、特に老成したものは *kwestap nego* (pl. *kwesikap nego*) と呼ぶ。ヤギばかりでなく、ヤギ、ヒツジ (*nego*) 全体のリーダーとなるからである。去勢した雄ヤギを *tesimiyet* (pl. *tesimik*) と呼ぶ。雌ヤギは、成獣になってから3頭目の子供を出産するまでを、かつては *subendo* (pl. *subenek*) それ以降を *iywoget* (pl. *iywogik*) と呼んだけれども、ウシと並行的な現象として、今日では初産時をもって *subendo* から *iywoget* への移行点と見るのが通例になっている。さらに、*iywoget* が閉経すると、*cherakanet* と呼ぶ。

ヒツジは、雄の成獣を *mengit* (pl. *mengichik*) と言う。雄ヒツジは、雄ヤギのように活発に行動しないうえ、もともと脂肉が多いので、滅多に去勢されない。何らかの理由から去勢された雄ヒツジがあれば、ヤギの用語を借りて、同様に *tesimiyet* と呼ぶ。雌ヒツジの成熟段階に基づく分類は、雌ヤギの場合と全く同じである。

以上つぶさに検討した通り、ヤギ・ヒツジの雌獣の場合、成熟段階による分類では、多産雌と老雌に関してウシと同一の語彙が用いられている。なお、*subendo* という語は、すべての動物の未産雌に準用される場合がある。

<ヤギ>



<ヒツジ>

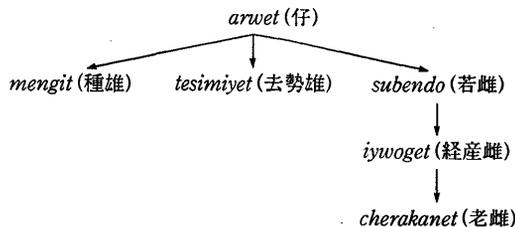


図3 *artet* (ヤギ・ヒツジ) の性と成熟段階による分類

ヤギとヒツジの性と成熟段階による分類を図3に示しておこう。

3. ウシ、ヤギ・ヒツジの個体への言及

キブシギスの飼養するウシ、ヤギ、ヒツジの個体には、極めて多様な外面的特徴を観察できる。キブシギスの人々もそれらに細かな有意差を見出しており、それらを性格や行動上の特徴と合わせて特定個体への言及指標とし、家畜管理に役立てているばかりでなく、それらの諸特徴に重大な象徴性をも付与している。しかし、本稿では、この事実が家畜の管理と関わり合う側面だけにテーマを限定し、象徴的側面には、家畜管理に関わる限りで必要最小限の言及をするに留める。

1) 家畜の毛色および色模様の発現への対応

キブシギスのウシ、ヤギ、ヒツジの毛色および色模様には、実に多様な変異が見出される。太田は、「家畜では、同一種の中での個体間の体色の変異幅が大きい。毛色変異は集団中に多型的に維持されてきており、これは家畜化にともなって自然淘汰圧が低下し、潜在的な遺伝的変異が顕在化した現象だとされている」[太田 1987a: 745]と述べている。とは言え、一般的に家畜化という野生動物の文化化に伴って生じるこの傾向をどのような形で認知するか、またそれを助長するか、黙認するか、あるいは抑制ないし抑止するののかという選択もまたすぐれて文化的なものであることを見逃すことはできない。

太田は、トゥルカナの人々の場合、ウシの種雄の選択基準は、第一に獣の身体の大きさであるとされるものの、「実際の私の観察では、人々はひとつの家畜群の体色が結果的であれ、多様に維持されるような種オスを選択しているように思われる」[1987a: 751]と言う。太田は、同じ家の、母親を異にする兄弟集団間における家畜群の外見上の差異化という機能に着目しながら、トゥルカナの人々が家畜の個体間に体色変異が発生するように、積極的かつ肯定的に介入していることを示唆する[1987a: 752]。一方、例えば、明治期に日本の各地では、明確に経済性を最優先させて、体色も含めたウシの遺伝形質の単一化に努めた。このようにして、一例を挙げれば「豊後の黒牛、肥後の赤牛」と言うごとく、人口に膾炙するまでにウシの地方的特化が遂行されたのである。これは、ウシの体色変異に積極的かつ否定的に介入した例である。

トゥルカナの人々は、(ラクダと共に)ロバも、ウシやヤギ・ヒツジと同様、毛色の変異に基づいて多様に分類していると言う[太田 1987b]。一方、キブシギスの人々

は、ロバの毛色に差異があるとは少しも思っていない。トゥルカナには、家畜 (sg. *ebarasit*, pl. *ngibaran*) というカテゴリーがあると言う [太田 1987a: 733] が、前章で詳しく検討した通り、キプシギスにはそのような概念は存在しない。キプシギスにとって、ロバは、「家畜」でもなければ、ヒト、ウシ、ヤギ、ヒツジのような *ga* (家) の領域に所属する動物でもなく、*timin* (藪) に住む動物である *tiondo* の一つに過ぎない。キプシギスにとって、どの *tiondo* の種類も単一の外見と単一の性格を持つ存在、すなわち没個体的存在でしかなく、*tiondo* の一つであるロバもその例外ではあり得ない。だから、ロバは *ga* (家) 空間に生活しながら、他の *ga* (家) 空間の生活者のような個性を認知されないのである。トゥルカナとキプシギスのロバに対する個体認識についての鮮明な対照性もまた、動物の毛色変異に対する人間の認知の対応のあり方が、いかに文化的なものであるかを良く物語っているとと言えるだろう。

キプシギスの人々は、トゥルカナの人々とは異なり、ウシ、ヤギ、ヒツジの種雄選びに関しては、毛色についての個人的な嗜好以外にはどのような技術的操作も加えていない。しかしながら、キプシギスの種雄選びに関する対応もまた文化的なものである。それは毛色の多様な変異の発現に対する不介入と見るよりも、むしろそれなりに積極的で肯定的な介入と見なされるべきである。例えば、トゥルカナとキプシギスの比較において見出されるようなその積極性の程度の差は、あくまでも、直接的な文化接触の無い両民族を抽象的に比較した場合の相対的な差である。キプシギスの人々は、かつては、自分の好みの毛色の牛を他民族から生命を堵して略奪したし、今日では他の人々の間に買い求める。毛色変異が担う機能に対する各民族による評価もまた、これと同様に判断されるべきであろう。

2) 個体名を付与する時期と、その歴史的变化

何らかの特徴に基づいて個体名が与えられるのは、雌ウシの場合、今日では、最初の出産を済ませてからであるが、かつては、第3子を出産してから、すなわち *iywoget* (多産雌) の段階に達してからであった。雄ウシの場合も、雌ウシのこの成熟段階に相当する時期が個体名を付与する時点となる。

個体名を得るまでは、各個体は、母獣の個体名にちなんで「何某の *moita* (新生仔)」, 「何某の *roriyat* (未産雌)」などと呼ばれる。かつて、雌ウシは、第3子出産までは個体名を与えられなかったので、例えば、すでに第2子を産んだ *twoteiwot* (経産雌) は、その母ウシにちなんで「何某の *twoteiwot*」, その子供達は「何某の *twoteiwot* の *moita* (新生仔)」, 「何某の *twoteiwot* の *roriyat* (未産雌)」, 「何某の *twoteiwot* の *unwet*

(若雄)」などと呼ばれていた。

一夫多妻を家族の構造的前提としているキプシギスでは、かつても現在も、ある男性の家 (*kap-chi*) のうち、各妻単位の家 (*kop-chi*) がウシの管理単位であり、実質上のウシの相続単位である。各妻単位の家 (*kop-chi*)——これを、便宜的に、以下では世帯と呼ぶ——では、ウシの系統認知が全成員によって自明の事実として共有されているので、このように複雑なウシの母系的な個体言及は実際上簡略化されている。すなわち、まだ個体名を付与する成熟段階に達していない個体は、文脈が明らかである限りは、その個体の実際の毛色にかかわらず、その系統分節の命名上の起点となる母ウシ (あるいは祖母ウシ) の名で言及され、指示されることが多い。

東アフリカの幾つかの社会では、家畜の母子に同一名が付与されていると報告されている。しかしながら、キプシギス社会に10年間関わり続けた経験に照らしてみると、実際それらの諸社会で果して子獣が一生を通して母獣と同一の個体名で言及されているかどうか疑問が残る。特定の個体のライフ・ヒストリーを追って、慎重に再検討する必要があるのではないと思われる。

さて、上に述べたウシの個体名付与慣行の変化もまた、先に述べたウシの性と成長段階による分類慣行上の変化と軌を一にしており、それらは共に、ヒトの婚姻慣行および妻が夫の家族に編入される手順が近代化過程で経た変化に則応するものであると考えられる。だが、ここで婚姻慣行の変化を詳しく論じることは、本論稿の主旨から外れることになるので、簡略に述べるに留めたい。

かつて、キプシギスでは、婚資すなわち花嫁代償は、現在以上に子供代償という性格を強く持っていた。そこで、婚資は、第3子の出産を待って完納され、それに次いでどのような理由によっても伴侶関係を解消できなくする *katunisiet* (「結婚」) 儀礼が行われ、これによって婚入した女性の夫方氏族への編入が確実なものとなった。伴侶関係の成立は、それに先立つ *ratet* (「結び」) 儀礼を経て社会的認知を受けたのだが、*katunisiet* 儀礼が執行されることによって、初めて「離婚」が不可能になったのであった。その変化の理由と経過の説明は、ここでは省略せざるを得ないが、今日では、「結び」儀礼をもって *katunisiet* (「結婚」) 儀礼と称し、これをケニアの国家法が規定する *marriage* に対置させている。だが、かつては、最低3人の子供をもうけて *katunisiet* 儀礼を受けることが壮年女性 (*chebioset*) の資格を得る条件であると見なされていた。多産多死社会であった (、そして今もある) キプシギス社会では、婚入した女性がこの条件を満たすことが「火 (*mat*) を燃やす (*lal*) こと」、すなわち、「夫の氏族の永遠の生命 (*mat*) を確保すること」であると観念されていたからである [小馬 1987]。

ちなみに、経産雌を表わすキプシギス語である *twoteiwot* とは、「名誉をもたらす」(*tei* または *tech*) ことを「成し遂げた」(*two*) 者を意味している。すなわち、出産能力を現実に示すことによって、飼主に名誉をもたらした者(ウシ)が *twoteiwot* なのである。本来三子以上の多産を証し得たウシやヤギ・ヒツジを指す *iywoget* の語は、「薪を(火に)くべる」を意味する動詞 *iywoki* [*mat*] の派生語で、「(氏族の)火を点した者」、換言すれば氏族の永続を実現した者を意味している。氏族の所有するウシが多産であることは、牛牧民キプシギスの文化的脈絡では、氏族がそれらのウシを婚資として用立てて他氏族から女性を婚入させ、その女性の出産能力によって子孫を繁栄させ得ること——つまり、「火を燃やす」(*lal mat*) こと——と直結しているのである。

もちろん、現実と理念とは完全に一致してはいない。かつて不妊は、それだけでは離婚の正当な根拠となり得なかった。だが、今日の慣習法では特にその傾向が著しくなっている。加えて、今では、かつての *katunisiet* 儀礼はすっかりに廃れ、*ratel* (結び) 儀礼さえ執行すれば女性は完全に夫の氏族に編入される。このような婚姻慣行の変化が、一方ではウシ、ヤギ、ヒツジの性と成熟段階による分類や個体名付与の慣行に並行的な変化または混乱をもたらしているのだと考えられる。

ウシやヤギ・ヒツジは、キプシギスの人々にとって、伝統的には、いわば自らを写す鏡として、自己と世界を認識するうえでの不可欠の媒介物であり、これらの動物に関する語彙に依存することなしに世界や自己を語ることがほとんど不可能なのである [小馬 1983: 35-37]。反面、これらの動物の存在の諸側面を叙述する場合にもまた、ヒトの社会的なあり方を離れることが極めて困難なのである。もし両者の相互鏡像的關係を逸脱しようとするれば、その試みは自己認識および世界認識の体系的基盤を突き崩すことにも繋りかねないからである。キプシギスは、今日、近代的な諸価値とそれを媒介する近代的な諸制度の急速な普及の中で、価値観の多様化による世代間疎隔に直面している。特に若い世代の多くの者は、国民国家であるケニアにおける社会的上昇手段としての受験戦争に夢破れ、伝統社会と近代社会との狭間を漂いながら、自己と世界についての体系的な認識を確立すべき基盤を探しあぐねているように見える。この現実が、ウシ、ヒツジ、ヤギの性と成熟段階による分類および個体名付与慣行に見られる揺らぎや変化の原因でもあれば、また結果でもあると考えられなければならないだろう。

3) 獣の *iitoondo* による分類と個体名の付与

さて、ウシ、ヤギ、ヒツジの毛色や色模様などによる個体への言及、あるいは個

体名付与に話題を移そう。これらの特徴を表わすキプシギス語は *iitoondo* (単数定形 *iitoondo*, 単数不定形 *iitoon*, 複数定形 *iitoonwek*, 複数不定形 *iitoonua*) である。*iitoondo* は、日本語の「色」や英語の“colour”には直接対応しない。*iitoondo* とは、何かの見かけ、似寄り、あるいはイメージとでも訳せるものであり、特にヒト、ウシ、ヤギ、ヒツジの見かけを初めとする特徴について言われることが多い。*iitoondo* の意味領域は、ウシなどの場合、毛色、体表の色模様、体の特定部分の色彩的特徴、体型、角や耳の形態、性格、生活史上の特徴なども包含している。この語は、例えば、“*Kerge iitoondap lagochu*”. (「この子供達〔の外見〕は似ている」) のように用いられる。また、*iitoondo* の概念は、空や太陽の色彩やその変異、植物や *tiondo* (野生陸棲動物), *taritiet* (トリ), *kiy* (ムシ, もの) にも適用される。それらのものとの類似性 (*iitoondo*) に依存して、ウシの体色上の特徴 (*iitoondo*) がそれらのものにちなんで言及される場合もある。このような相互依存関係が見られるけれども、この概念は、何よりもまずヒトおよびウシ、ヤギ、ヒツジの見かけを似寄りとして、つまり類的個性として記述するものであると考えられる。次に引用するオーチャードソンの記述は——*iitoondo* を colour として把握したことによって決定的な失敗を犯しているものの——この間の事情の一端を示しているだろう。「色彩名称は、しばしばキプシギスのウシ達の奇妙な色彩から派生しているか、あるいはその色彩を述べるのに用いる語である」[ORCHARDSON 1961: 36]。

キプシギス語には、万物の色彩を、それだけ取り出して指示する抽象的な概念は存在しない。楯の表面や、敵を殺した者の顔面および体側などに赤や白の泥を塗ったり模様を描くことを意味する他動詞 *saal* の派生語として、それら色模様を意味する *chesaaleitet* (単数定形 *chesaaleitet*, 単数不定形 *chesaaleywa*, 複数定形 *chesooleywek*, 複数不定形 *chesoole*) がある。*chesaaleitet* は、しかし、ヒト、ウシ、ヤギ、ヒツジの見かけや似寄りを意味の内包としないし、*iitoondo* は上記のような彩色による色模様を意味の内包としない。

そこで、キプシギスの学校教育などでは、英語の colour に対応する語として、スワヒリ語の *rangi* にキプシギス語の単数定形接尾辞を付けてキプシギス語化した *rangiat* (pl. *rangisiek* または *rangik*) を採用している。今日、キプシギスでは、日常生活でも言及対象の他の諸属性から分離して色彩を抽象的に叙述するためには、*iitoondo* でも *chesaaleitet* でもなく *rangiat* を用いることが多い。なお、ナンディ語を標準言語とするカレンジン語では、colour の訳語として *iitoondo* ではなく *chesaaleitet*——表記は、キプシギス語とは異なり *jesaleitet*——が使われている。これらの事実、キプシギス語の *iitoondo* 概念が英語の colour 概念といかに異ったものであるかを物語ると共に、

それがヒト、ウシ、ヤギおよびヒツジの個体類別と不可分に結び合わさっていることを良く物語っているであろう。

このように、キプシギスの人々は、ウシおよびヤギ・ヒツジの個体をあくまでも単一で不可分な *iitoondo* という概念によって類別しているのであるが、以下にはあくまでも分析の便宜上、*iitoondo* を、i) 単色の毛色、ii) 色模様、iii) 身体の一部に発現する特徴的な毛色、iv) 角の形態、v) 体型上の特徴、vi) 性格および生活史にちなむ *iitoondo* の各群に分けて、順次論じて行くことにしたい。

i) 単色の毛色にちなむ *iitoondo*

上述の通り、*iitoondo* と colour とは必ずしもうまく対応する概念ではなく、また *iitoondo* を日本の色彩概念に対応させることも難しい。表2には、各 *iitoondo* にちなむウシとヤギ・ヒツジの分類名称を挙げる。ただし、この *iitoondo* にちなむ分類名称は、これもまた *iitoondo* と呼ばれるが、次章で明らかにする通り、個体名称に転化していると言えるので、以下には、単に個体名と記述する。なおどの群でも、ウシの場合、性差が個体名に反映されている。しかるに、ヤギとヒツジでは、性差ばかりでなく、種の差も個体名に反映されていない。ただし、雄ウシの場合には、去勢されているかどうかは、個体名に反映されていない。

表2を眺めると、*iitoondo* は、雌ウシと最も強い対応関係を持っていることが判る。そこには、一対一の対応関係がある。雄ウシでは、一つの *iitoondo* と対応する個体名は必ずしも一つではなく、二つまたは三つのことがある。一方、雄ウシの一つの名称が二つの *iitoondo* に対応している場合もある。そればかりでなく、[4] *kaki* (英語の *khaki* の借用) のように外来の色概念に置き代っているもの、[13'] *james* のように英国の人名に起源を持つが命名理由が不明のものがある。なお、*kaki* は、第一次世界大戦に、英国アフリカ人小銃部隊として、ケニアのどの民族よりも大量に動員されたキプシギスの男達が持ち帰った色彩概念である。

ヤギ・ヒツジでは、*oiis* と *omoi* の対立が解消されているし、[6] と [10] に対しては単一の *chebarerai* が対応している。*iitoondo* に女性接頭辞 *che[-p]* を冠することによってヤギ・ヒツジの種を示す傾向が強い。また、*chemur* のごとく、雌ウシとヤギ・ヒツジが区別されていない場合もある。理由は不明である。

さらに興味深いのは、*lelechwo* という日常生活でも滅多に言及されることのない *iitoondo* までが動員されいながら、*nyalil* (緑、青緑、薄い青空の色) と言う草や木の葉や、明け方から暫くの間空の色の描写にも用いられる主要な *iitoondo* が動員されていない。*nyalil* は、しかし、ウシの体色の描写に全く用いられないわけではない。

表2 単一の体色に関する *iitoondo* と個体名

雄 ウシ	雌 ウシ	ヤギ・ヒツジ	<i>iitoondo</i>	摘 用
[1] <i>Chemalel</i>	[1'] <i>Koilel</i> [1'-a] <i>Masiwa</i>	[1''] <i>Chepkelel</i>	<i>lel</i>	<i>lel</i> …白, <i>masiwa</i> …牛乳 (スワヒリ語)→純白
[2] <i>Silwoi</i>	[2'] <i>Kipsirwoi</i> [1'] <i>Koilel</i>	[2''] <i>Chepchabas</i>	<i>keron</i>	<i>siwvon</i> …白, <i>lel</i> …白→ (やや灰色がかった)白
[3] <i>Chemunyan</i>	[3'] <i>Munyan</i>	—	<i>munyat</i>	<i>munyat</i> …(カミ)タバコに味 付けする天然, 炭酸ナトリ ウム→赤味がかった白
[4] <i>Simbol</i>	[4'] <i>Kaki</i>	[4''] <i>Chepng'emui</i>	<i>simbolian</i>	<i>simbolian</i> …灰色がかった様 々な色
[5] <i>Toleliyai</i>	[4'] <i>Kaki</i> [8'] <i>Indomur</i>	—	<i>toleliyon</i>	<i>toleliyon</i> …黄→黄色がっ た様々な色, カーキ色
[6] <i>Chesitien</i>	[6'] <i>Kipsitien</i>	[6''] <i>Chebarerai</i>	<i>sitien</i>	<i>sitien</i> …黄土色, 明るい茶色
[7] <i>Cheboiis</i>	[7'] <i>Boiis</i>	[7''] <i>Chebomoi</i>	<i>oiis</i>	<i>oiis</i> …褐色, 茶褐色
[8] <i>Chemur</i>	[8'] <i>Indomur</i> [8'-a] <i>Kuro</i> [8'-b] <i>Kimuriet</i>	[8''] <i>Chemur</i>	<i>mur</i>	<i>mur</i> …茶色
[9] <i>Seroi</i>	[9'] <i>Sero</i> [9'-a] <i>Serombili</i>	[9''] <i>Chepseroi</i>	<i>seron</i>	<i>seron</i> …黒味がかった赤 (あ るいは赤と黒のまだら)
[10] <i>Omoi</i>	[10'] <i>Kibomoi</i>	[10''] <i>Chebomoi</i>	<i>omon</i>	<i>omon</i> …濃い茶色, 紫
[11] <i>Chebirir</i>	[7'] <i>Boiis</i>	[6''] <i>Chebarerai</i>	<i>birir</i>	<i>birir</i> …赤, <i>oiis</i> …褐色, 茶褐 色→赤, 赤味の強い色
[12] <i>Chemarus</i>	[12'] <i>Marus</i>	—	<i>arus</i>	<i>arus</i> …灰色がかった青
[13] <i>Tuiyai</i>	[13'] "James"	[13''] <i>Cheptui</i>	<i>tui</i>	<i>tui</i> …黒, 濃い青, <i>arus</i> 灰色 がかった青→黒, 青
[13-a] <i>Tuimissing'</i>	[13'-a] <i>Tuimissing'</i>	—	(<i>tui missing'</i>)	(特に濃い黒)
[14] <i>Lelechwo</i>	[14'] <i>Kiplelechwo</i>	[14''] <i>Chelelechwo</i>	<i>lelechwet</i>	<i>lelechwet</i> …丘陵に生える木 で灰色の花をつける→ <i>lele- chwet</i> の花に似た灰色

nyalilei (緑色の去勢ウシ) とは, (去勢雄, 種雄を問わず) この色の雄ウシを沢山持っている人物に与えられ, かつては一般的な個人名 (の一種) であった。

ii) 色模様になむ *iitoondo* と個体名

第2の群は, 複数の体色がどのような組み合わせで, 獣の身体のどの部位に発現するかによって決まる *iitoondo* である。これを, 表3にまとめておこう。

この群では, 雌ウシの個体名も雄ウシの個体名も *iitoondo* に一対一の対応を示している。例外は, [32'] と [32'-a] であるが, [32'-a] は表の適用欄における説明からも判る通り比較的最近現れた個体名であり, 当該の色模様であるだけでなく, それに加えて気性が激しいという特徴をもつ雄ウシに与えられる。この事実も, ウシの *iitoo-*

表3 色模様に関わる *iitoondo* と個体名

雌 ウ シ	雄 ウ シ	ヤギ・ヒツジ	<i>iitoondo</i>	摘 要
[2] <i>Sirwoi</i>	[2'] <i>Kipsirwoi</i> [1'] <i>Koilel</i>	[2''] <i>Chepkelel</i>	<i>sirwon</i>	<i>sirwon</i> …白, <i>lel</i> …白→全身白いが, ほんの僅かに他の色が混る。
[15] <i>Keroi</i>	[15'] <i>Mardadi</i>	[15''] <i>Chepchabas</i>	<i>keron</i>	<i>keroi</i> < <i>koroitiet</i> …白黒コロンブス猿, <i>mardadi</i> < <i>maridadi</i> (スワヒリ語) …装飾, i.e. 女性のイニシエーションに用いるコロンブス猿の装身 具→白黒コロンブス猿のように, 全身が白と黒の大きなブチ。
[16] <i>Busiendo</i>	[16'] <i>Kibusien</i>	[16''] <i>Chebusien</i>	<i>busien</i>	全身が茶と黒, または茶と白のブチ。
[17] <i>Mogondo</i>	[17'] <i>Mogondo</i>	—	<i>mogon</i>	茶か白の地児茶黒い斑紋が入っている。
[18] <i>Chemarmar</i>	[18'] <i>Marmar</i>	—	<i>marmar</i>	比較的小さな白と黒のブチが全身にある。
[19] <i>Chemurgugu</i>	[19'] <i>Murgugu</i>	[19''] <i>Chemolok</i>	<i>murgurian</i>	黒か茶の帯が全身にある, あるいは, 全身に様々な色が入り混る。
[20] <i>Samoi</i>	[20'] <i>Kipsamoi</i>	—	<i>samoi</i>	<i>samoiyot</i> …i) 双児とその親や, 兄弟姉妹が3人以上死んだ後に生まれ た一人子の赤ん坊が手首にはめる ねじった鉄の環, ii) 牛の皮膚病 を治すために用いれ, ねじれた焼ごて→白, 黄, 赤などの地に, 虎 斑状に黒い毛が差している。
[21] <i>Legendo</i>	[21'] <i>Kipllegendo</i>	[16''] <i>Chebusien</i>	<i>legen</i>	<i>legen</i> …ヒョウの色模様。(cf. <i>Busiendo</i>)
[22] <i>Kebei</i>	[22'] <i>Olbas</i>	[22''] <i>Chepchabas</i>	<i>kebei</i> [<i>cha</i> -] <i>bas</i>	黒か茶または赤の地色だが, 腹部が白い。
[23] <i>Chesimatiyai</i>	[23'] <i>Simatiyai</i>	[23''] <i>Chesimatiyai</i>	<i>simatian</i>	茸毛。
[24] <i>Chesemwo</i>	[24'] <i>Kipsemwo</i>	—	<i>semwet</i>	<i>semwet</i> …多産により成女として尊敬される女性が用いる皮製の肩飾り →幅広い白色の帯がある。
[25] <i>Chepkelel</i>	[25'] <i>Kipkelel</i>	—	<i>kelel</i>	黒地だが, 両脇に少し白斑がある。
[26] <i>Cheptile</i>	[26'] <i>Kiptile</i>	[26''] <i>Cheptile</i>	<i>tile</i>	青味がかかった細かな斑文を全身にもつ。
[27] <i>Cheptisia</i>	[27'] <i>Kiptisia</i>	—	<i>tisiet</i>	<i>tisiet</i> …i) 青猿, ii) 母斑→黒い傷のような模様が全身にある。
[28] <i>Kimungen*</i>	[28'] <i>Kimungen</i>	[28''] <i>Chemungen</i>	<i>mungen</i>	脚に白黒の細かな斑がある。
[29] <i>Tilito</i>	[29'] <i>Kiptilito</i>	—	<i>tilito</i>	黒または茶の地が全身を占めるが, 尾の先だけが白い。
[30] <i>Chemungen*</i>	[30'] <i>Kimungen</i>	—	<i>mungen</i>	黒または茶の地が全身を占めるが, 尾の先と四却の先だけが白い。
[31] <i>Chepsigisin</i>	[31'] <i>Kipsigisin</i>	—	<i>sigisin</i>	<i>sigisiot</i> (pl. <i>sigisintik</i>) < <i>socks, stockings</i> (英語)→黒または茶の血が全身を 占めるが, 四脚の先だけが白い。
[32] <i>Cheseger</i>	[32'] <i>Sege</i> [32'-a] <i>Bilis</i>	[32''] <i>Kentogoch</i>	<i>segeriet</i>	<i>regeriet</i> …子安具, <i>bilis</i> < <i>police</i> (英語)…警察官 (の被る帽子の中央に ある徽章)→濃い地色の系統で, 額に白く目立つ星が一つある。 ([32''] は表4を参照せよ)

* [28]と[30]の相互関係は, 筆者もまだ十分に理解できていない。ここでは, 両者を別々の *iitoondo* としておいた。

ndo が単なる色模様に還元されていないことを示している。なお、この群にも [2] *sirwoi* を挙げたのは、ほぼ全身が白いけれども、他の色の斑が一つ、二つ見られる雌ウシも、全身がやや灰色がかった雌ウシ同様 *sirwoi* と呼ばれるからである。これもまた、筆者の *iitoondo* 群の分類の恣意性を示す事実である。

iii) 身体の一部位に発現する特徴的な毛色にちなむ *iitoondo* と個体名

獣の身体の一部位の一つに現われた特徴的な毛色に着目し、その毛色を示す *iitoondo* 名のすぐ後にその特定の部位の名称（単数不定形）を付け加わって作られたと分析できる構成を持つ *iitoondo* がある。このような *iitoondo* の変異は、出現の可能性を全項的に予想するとすれば、キプシギスが認知する獣の身体の一部位の総数に、表2と表3に挙げられた全 *iitoondo* を掛けた数に近いと考えられるはずである。

しかし、実際この群で着目されている獣の身体部位は、頭、頬、目の周囲、口唇、首、腹、乳、腰の九つに限られる。なお、脚と尾および肩の毛色の特徴は、その部位には直接言及しない独特の *iitoondo* となっている（表3の [28], [29], [30], [31], [32] および [24]）ので、この群には含めない。この九つの部位のうちでも、特に強く着目されているのは、頭と顔を合せた部分のものである。この部分では、顔 [51''] と頬 [37] は一つの *iitoondo* にしか関わっていないが、一方口唇 ([35], [39], [46], [47], [48], [51]), 目の周囲 ([34], [38], [50]), 頭 ([33], [36], [44], [45], [49], [52]) は数多くの *iitoondo* と関わっている。これに加えて、地色が濃い毛色である獣の頭(正確には額)に白い星があることを意味する *iitoondo* (表3の [32]) は、部位名に言及しない *iitoondo* となっている。また、頬がヤギ・ヒツジだけの *iitoondo* に関係していることが目を引く。

頭と顔を含む部分以外の身体部位では、首、腹、乳房(乳首)および腰が *iitoondo* の差異化に与っているものの、それぞれが一つの *iitoondo* の構成要素となっているにすぎない。ただし、[41] *chelelmo* よりもずっと広く腹部を被う白い毛色は、*keben* (表3の [22]) という、部位に言及しない *iitoondo* になっている。

この群の *iitoondo* の構成要素として取りあげられている単色の *iitoondo* は、*tui* (黒), *lel* (白), *birir* (赤), *mur* (茶), *arus* (灰色がかった青) である。他のすべての単色の *iitoondo* は、これら五つの単色の *iitoondo* のうちで最も近似的なものに置き換えられている。五つの中でも、*lel* (白) が最も注目されており、先述の九つの部位のうち八部位と結合して独自の *iitoondo* となっている。この群の *iitoondo* の構成要素に選ばれた非単色の *iitoondo* を見ると、*simbai* と *matui* は対照性、*sing'o* は模様、*kamar* は形象というように、色彩以外の要素を内包している。また、雄ウシには、同じ *iitoondo*

表4 身体の一部に現れる特徴的な

基本部位 iitoondo	頭(額) metit/met	顔 toget/togoch	頬 matanda/matang'	目 konda/kong'
tui (黒, 濃い青)	[33] Tuimet [33'] Kiptuimet — tuimet	—	— — [51''] Tuimatang' tuimatang'	[34] Cheptuikong' [34'] [Ki-] Ptuikong' — tuikong'
lel (白)	[36] Lelmet — — lelmet	[37] Leltogoch — [32''] Kentogoch leltogoch/kentogoch'	—	[38] Lelkong' — — lelkong'
birir (赤)	[44] Birirmet — [44''] Birirmet birirmet	—	—	—
mur (茶)	[45] Murmet [45'] Kimurmet [45''] Chemurmet murmet	—	—	—
arus (灰色がかった青)	—	—	—	—
simbai (白色に微細な黒 や茶の斑群)	—	—	—	—
sing'oo (主たる地色と異 なる色)	[49] Sing'omet [49'] Kipsing'omet — sing'omet	—	—	—
kamar (白い輪)	—	—	—	[50] Kamarkong' [50'] Sitima — kamarkong'/sitima
(虎斑状の黒い縞)	—	—	—	—
matui (黒以外)	[52] Matuimet* — — matuimet	—	—	—

* 全身が黒で、頭だけが他の色

毛色に因む *iitoondo* と個体名

口唇 <i>kutit/kut</i>	首 <i>katit/kat</i>	腹 <i>moet/mo</i>	乳房(乳首) <i>kinet/kina</i>	腰 <i>suwet/suwe</i>
[35] <i>Cheptuigut</i> [35'] <i>Kiptuigut</i> — <i>tuigut</i>	—	—	—	—
[39] <i>Lelgut</i> [39'] <i>Kiptlelgut</i> — <i>lelgut</i>	[40] <i>Tilegat</i> [40'] <i>Kiptilegat</i> — <i>tilegat</i>	[41] <i>Chelelmo</i> — [41''] <i>Chelelmo</i> <i>lelmo</i>	[42] <i>Lelgina</i> — — <i>lelgina</i>	[43] <i>Lelsuwe</i> [43'] <i>Leso</i> — <i>lelsuwe/leso</i>
—	—	—	—	—
[46] <i>Chemurgut</i> [46'] <i>Murgut</i> — <i>murgut</i>	—	—	—	—
[47] <i>Arusgut</i> [47'] <i>Kibarusgut</i> [47''] <i>Chebarusgut</i> <i>arusgut</i>	—	—	—	—
[48] <i>Simbaigut</i> — — <i>simbaigut</i>	—	—	—	—
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
[51] <i>Samoigut</i> — — <i>Samoigut</i>	—	—	—	—
—	—	—	—	—

上段…雌ウシ, 中上段…雄ウシ, 中下段…ヤギ・ヒツジ, 下段…*iitoondo*

の雌ウシに対応する個体名がしばしば存在せず、ヤギ・ヒツジではそれが存在しない確率をもっとも大きいことを表4から読み取ることができる。

この群では、同一の *iitoondo* を持つ雌ウシ、雄ウシ、およびヤギ・ヒツジの三者を区別するためには、女性接頭辞 (*che[-p]*)、男性接頭辞 (*ki[-p]*)、および無接頭辞 (ϕ) の三項対立による対比が援用されている。まず、雌ウシと雄ウシのみが対立を成す場合には、“雌：雄： ϕ ：*kip*” ([33]：[33’], [39]：[39’], [40]：[40’], [49]：[49’]), または“雌：雄：*chep*：*kip*” ([34]：[34’], [35]：[35’], “雌：雄：*chep*： ϕ ” ([46]：[46’]), あるいは別々の語を用いる ([43]：[43’], [50]：[50’]) の四通りの対比の仕方が見て取れる。

次に、三者が対立を成す場合はどうだろうか。それは、二例 ([45]：[45’]：[45’’], [47]：[47’]：[47’’]) ではあるが、どちらにも“雌：雄：ヤギ・ヒツジ： ϕ ：*kip*：*chep*”の対比が見出される。

雌ウシとヤギ・ヒツジのみが類似の特徴を持つと想定されている場合は、両者を異なる *iitoondo* と見なす ([37]：[32’]) か、または同じ *iitoondo* と見なすばかりでなく個体名も差異化しない ([41]=[41’], [44]=[44’]) かのいずれかである。

以上の事例の分析から、同じ *iitoondo* を持つ雌ウシ、雄ウシ、およびヤギ・ヒツジの個体名を接頭辞の対比によって差異化する一定の原則を見出すことは、必ずしも容易ではない。しかしながら、三者が対立する二例と、二者対立では“雌：雄： ϕ ：*kip*”の対立が最も多いことを考えあわせれば、三者の対立を“雌ウシ：雄ウシ：ヤギ・ヒツジ： ϕ ：*kip*：*chep*”で表示することがより一般的であるが、それにもかかわらず筆者の調査が不徹底であったために、この原則を見逃した可能性も完全には否定できない。

さて、ここで ii および iii 群に分類された *iitoondo* を持つ個体の幾つかの例をパターン化した図で示しておこう (図4)。

iv) 角の形態に因む *iitoondo* と個体名

この群に属するものを表5にまとめた。ヤギ・ヒツジは、角が片方または両方無い場合 ([64’], [65’]) 以外は角の形態に着目されていない。一方、ウシの場合は、角の特異な形態は13種類に分類され、それぞれが重要な *iitoondo* として認識されている (図5参照)。

キプシギスと言語文化、社会的に極めて近縁であり、両民族の草創以来一貫して強固な政治的連帯と共通の「われわれ意識」を維持して来たナンディの人々の間では、詳しい技術的な報告こそ無いものの、ウシの角を人工的に矯正する慣行があったこと

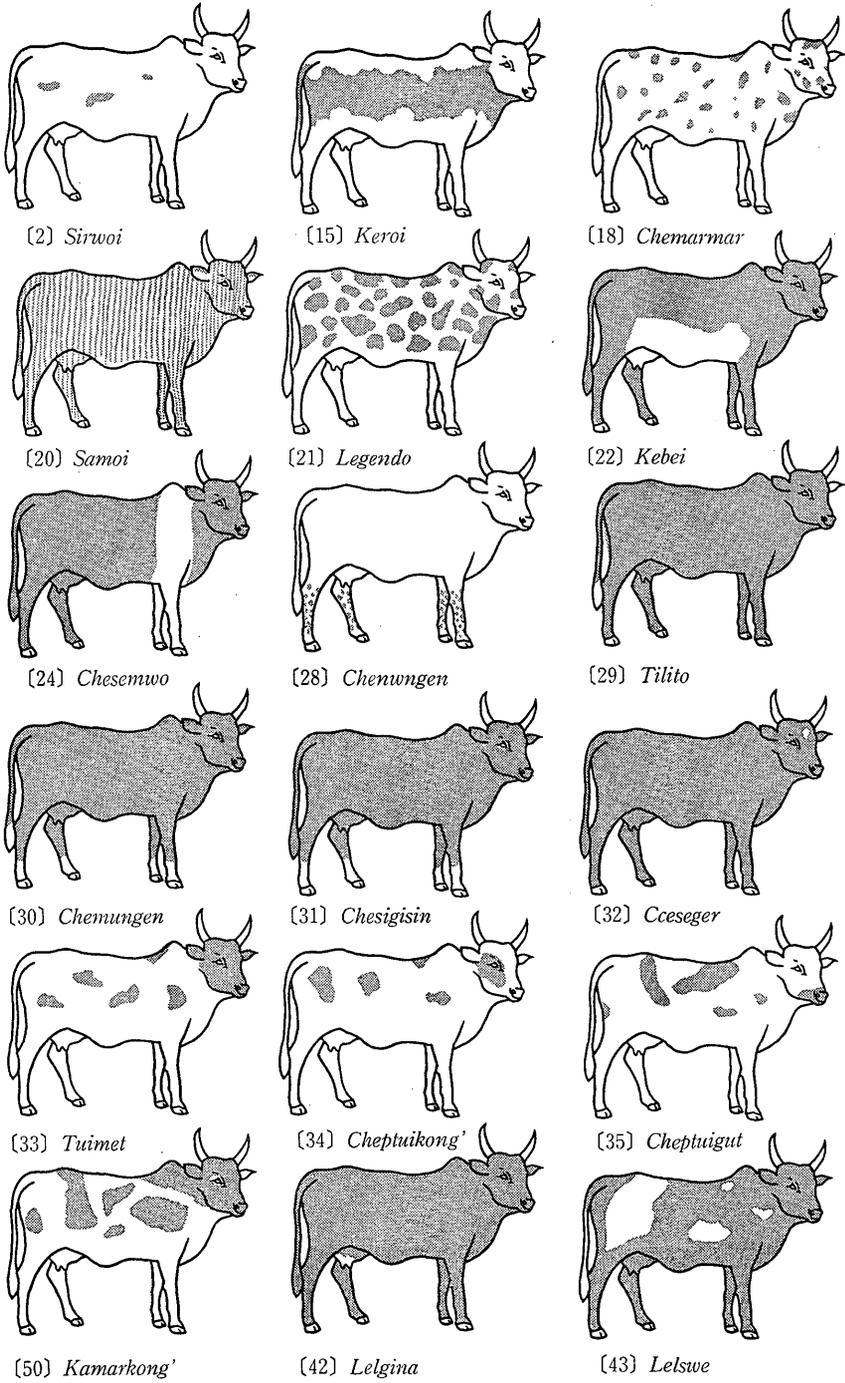


図4 体色と色模様因む雌ウシの個体名

表5 角の形態に関する *iitoondo* と個体名

雌 ウシ	雄 ウシ	ヤギ・ヒツジ	<i>iitoondo</i>	摘 用
[53] <i>Buruk</i>	[53'] <i>Kiburuk</i>	—	<i>buruk</i>	両方が前を向く
[54] <i>Setan</i>	[54'] <i>Kipsetan</i>	—	<i>setan</i>	両方が下を向く
[55] <i>Tebesmet</i>	[55'] <i>Mastamet</i>	—	<i>tebesmet</i> / <i>mastamet</i>	まっすぐに両脇を向き、大きい
[56] <i>Ng'elech</i>	[56'] <i>Ng'elech</i>	—	<i>ng'elech</i>	片方が上、他方が下を向く
[57] <i>Chelong'ong'</i>	[57'] <i>Chelong'ong'</i>	—	<i>long'ong'</i>	両方が後を向く
[58] —	[58'] <i>Chelal</i>	—	<i>lal</i>	まっすぐな角がV字を作る
[59] <i>Chepyogoset</i>	[59'] <i>Kamari</i>	—	<i>nyogoset</i> / <i>kamari</i>	片方が前、他方が後を向く
[60] <i>Tiramet</i>	[60'] <i>Sosiot</i> *	—	<i>tiramet/sosiot</i>	両方の先が近づき円をなす
[61] <i>Ng'atimet</i>	[61'] <i>Sindanu</i> **	—	<i>ng'atimet</i> / <i>sindanu</i>	先が鋭い
[62] —	[62'] <i>Nyondo</i> ***	—	<i>nyondo</i>	極めて短かく、極めて太い
[63] <i>Mororoch</i>	[63'] <i>Mororoch</i>	—	<i>mororochi</i>	根本が頭骨に付かず、ブラブラ
[64] <i>Chepkuinet</i>	[64'] <i>Kipkuinet</i>	[64''] <i>Chepkuinet</i>	<i>kuinet</i> ***	片方が無い
[65] <i>Karoi</i>	[65'] <i>Kipkaroi</i>	[65''] <i>Chepkaroi</i>	<i>karon</i>	両方が無い

* *sosiot*…耶子, ** <*sindano* (Sw.)…針, *** <*nyondo* (Sw.)…金槌, **** *kuinet*…角(単数)

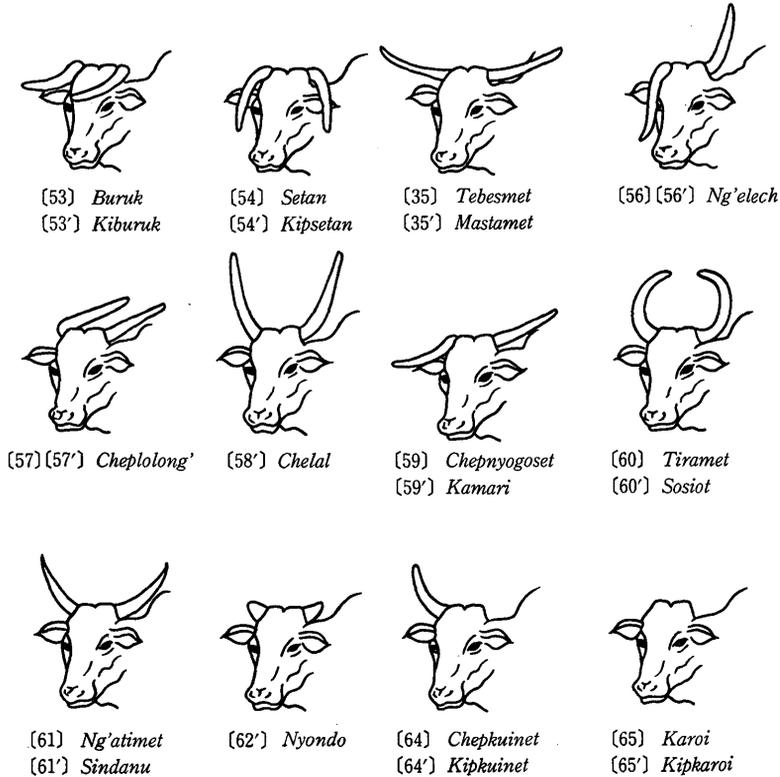


図5 ウシの角の形態に因む個体名

が知られている [HOLLIS 1909: 22]。だが、キプシギスについては、どの民族誌的報告もウシの角の矯正慣行には触れていない。筆者の知る限りでは、鋭利過ぎる角の先端を少し切り取る以外には、今日ではいかなる角の矯正も行われていないようだ。

それにもかかわらず、ウシの角の13の特異な形態が弁別されており、またそのような角を持ったウシが散見される。では、この事実を一体どう解釈すれば良いのだろうか。確かに、植民地時代前半までは、同じ年齢組に属する二人の男が屋内空間の西側と東側に別れて自分のウシを自慢し合う牛褒め合戦が行われ、その際に両腕でウシの角の形を摸す仕種も行われていたらしい。しかしながら、今日では、その慣行も廃れているし、人々が牛の角の形態に大きな愛着を抱いているとも考え難い。今のところ、筆者は、角の特異な形状が遺伝的なものであるか、あるいはそのような形状の角を持つウシが他民族から何らかの仕方キプシギスにもたらされているか、もしくはその両方の要因が複合的に作用しているのであろうと推測するばかりである。

v) 身体その他の特徴にちなむ *iitoondo* と個体名

i~iv 群以外に獣の身体に見出される特徴にちなむ *iitoondo* には、表6に挙げたようなものがある。ウシについては11、ヤギ・ヒツジについては三つの *iitoondo* が識別されているが、*kenei* ([67], [67'], [67'']) を例外として、両者は重なり合っていない。

ウシの耳の切型は、かつては、あるウシがどの氏族の所有するものであるかを示す重要な指標であったと言う。しかしながら、1930年代後半には、すでに幾つかの大きな氏族以外にはウシの耳の切型を用いていなかったようである [PERISTIANY 1939: 125]。今日でも耳に切型のあるウシが時々見られるが、それはもはや氏族の所有の指標ではなく、個人の所有の指標となっている。同様に焼印を押すことも稀になった。現在では、特徴ある耳の切型や焼印のコードが、民族全体で共有され *iitoondo* として認識されているわけでははいない。耳に切型のあるウシは [69] *boroti*, [69'] *kiboroti*, 焼型のあるウシは [73] *chepserat*, [73'] *kipserat* と一般的に呼ばれ、個々の形式にちなんだ *iitoondo* の細分化は見られない。

vi) 性格および生活史にちなむ *iitoondo* と個体名

ウシ、ヤギ・ヒツジの *iitoondo* は、以上に見た i~v 群に属するものがほとんどである。その他には、獣の性格にちなむもの(表7)と生活史にちなむもの(表8)が少しづつ知られている。

後者については、若干説明を補足する必要があるだろう。まず、[84] *chepnyoguset*

表6 身体の形状に因む *iitoondo* と個体名

雌 ウシ	雄 ウシ	ヤギ・ヒツジ	<i>iitoondo</i>	摘 用
[66] <i>Chesambu</i>	[66'] <i>Sambu</i>	—	<i>sambu</i>	毛が長い
[67] <i>Chepkenei</i>	[67'] <i>Chepkenei</i>	[67''] <i>Chepkenei</i>	<i>kenei</i>	首の両脇にも毛房がある
[68] <i>Cheboit</i>	[68'] <i>Boit</i>	—	<i>boit</i>	耳が大きい
[69] <i>Boroti</i>	[69'] <i>Kiboroti</i>	—	<i>boroti</i>	} 耳に切り型がある
[69-a] <i>Chemasas</i>	[69'-a] <i>Kimasas</i>	—	<i>masas</i>	
[70] <i>Taming'in</i>	[70'] <i>Kongo*</i>	—	<i>ming'in kongo</i>	} 小さい
[70-a] <i>Langalanga</i>	—	—	<i>langalanga</i>	
—	[71'] <i>Merefu**</i>	—	<i>merefu</i>	長い, 肩丈が高い
[72] <i>Chebusin</i>	[72'] <i>Kibusin</i>	—	<i>busin</i>	尾が短いか, 先が切れている
[73] <i>Chepkorat</i>	[73'] <i>Kipkorat</i>	—	<i>korat</i>	盲
[74] <i>Chepserat</i>	[74'] <i>Kipserat</i>	—	<i>serat</i>	焼き印がある
[75] <i>Chemugun</i>	[75'] <i>Kimugun</i>	—	<i>mugun</i>	ビッコ
[76] <i>Chemuge</i>	[76'] <i>Kimuge</i>	—	<i>muge</i>	出ベン
[77] <i>Chemakong'</i>	[77'] <i>Kimakong'</i>	—	<i>makong'</i>	片目
—	—	[78''] <i>Chemiting'</i>	<i>miting'</i>	耳が極めて小さい
—	—	[79''] <i>Chepkuchong'</i>	<i>kuchong'</i>	生まれつき耳が無い

* *Kongo* < *Congo* (i.e. *Zaire*) ザイールの人々の背が低いことから

** *Merefu* < *mrefu* (Sw.) 背の高い者

表7 性格に因む *iitoondo* と個体名

雌 ウシ	雄 ウシ	ヤギ・ヒツジ	<i>iitoondo</i>	摘 用
[80] <i>Chepkorgen</i>	—	—	<i>korgen</i>	(誰にも搾乳させる程)大人しい
[81] <i>Chelongoch</i>	[81'] <i>Chelongoch</i>	—	<i>longoch</i>	人を恐れて逃げる
[82] <i>Chemelgut</i>	[82'] <i>Kimelgut</i>	—	<i>melgut</i>	口唇をなめまわす癖がある
[83] <i>Sungura</i>	[83'] <i>Sungura</i>	—	<i>sungura*</i>	跳ねる癖がある

* *sungura* < *sungura* (Sw.), ウサギ

表8 生活史に因む *iitoondo* と個体名

雌 ウシ	雄 ウシ	ヤギ・ヒツジ	<i>iitoondo</i>	摘 要
[84] <i>Chepnyogoset</i>	—	—	<i>chepnyogoset</i>	最初に手に入れた
[85] <i>Chesogor</i>	[85'] <i>Chesogor</i>	—	<i>sogoriet</i>	ツェツェ蠅 (<i>sogoriet</i>) にたかられた
[86] <i>Chemunai</i>	—	—	<i>munaiyet</i>	} 兄弟姉妹が何頭も若死にした後に生まれた (<i>tegeriyot</i>)
[86-a] <i>Chesamoi</i>	—	—	<i>samoiyet</i>	
[87] <i>Kuchur</i>	—	—	<i>kuchur</i>	<i>tegeriyot</i> であった祖先のウシの霊の再来として生まれた

は、買い取ったり他民族から略奪したりして、ある男性が最初に自分のものにした雌ウシである。

ところで、キプシギスには、兄弟姉妹が最低一人、多くの場合は連続して三人以上死んだ後に生まれた赤ん坊に、「印付け」(*tegerisiet*)と呼ぶ特別の儀礼を施す慣習がある。この赤ん坊の長生を祈るのが目的であるが、細目には実に多様な変異がある。ただし、それらの変異のすべてに共通する不可欠の要素は、ウシやヤギ・ヒツジの頸静脈から飲食用の血を採るのに用いる独特の矢で赤ん坊の右の耳朶に小さな切傷を付けることである。この傷は、このような赤ん坊とその家族の哀訴および彼等の先祖が犯したであろう何らかの罪に対する謝罪の象徴であり、至高の唯一神 (*Asis*) には隣憫を、人々には同情と寛容を促すために付けられるのである。耳朶の傷に加えて、右手首に真鍮の腕輪をはめるのもその儀礼の共通の要素である。このほかに、儀礼の変異に応じて、印付けられた子供であるそれと容易に同定できる種々の印が施される。「印付け」儀礼を受けた者を「印付きの者」(*tegeriyot*)と呼んでいる。

ウシにも「印付け」儀礼が行われ、「印付きの者」の概念が適用されている。ただし、ヒトの場合とは異なり、対象は、自分の産んだ仔ウシが連続死した雌ウシであり、その右耳に、印としての傷が同様の仕方で施される。ウシの「印付け」では、穂がスクリューのようにねじれた特殊な錐 (*samoiyot*) で右耳の耳郭上部に小孔をあけ、*munaiyet* と呼ぶ極く細い鎖をその小孔を通して耳郭に結ぶ。同様の「印付け」は女兒に対しても行われ、その対象となった女兒は *chemunai* という名を与えられる。「印付け」を施された雌ウシにも、同様に *chemunai* という個体名を与えるのが一般的である。あるいは、*samoiyot* 錐にちなんで、*chesamoi* という個体名を代りに与える場合もある——なお、*samoiyot* という *iitoondo* は、[20] および [20'] の *iitoondo* である *samoi* (即ち、白黒などの縞模様) と宗教観念上極めて重大な連合関係にあるのだが、本稿ではその説明を省略する。

[88] *kuchur* とは、「印付きの者」であるウシを先祖に持ち、そのウシが再来して魂と化した結果この世に生を受けた、と判定された雌ウシに与えられる個体名である。この慣行からは、キプシギスの人々が、ヒトについての再生観 ([小馬 1982] を参照せよ) と同様の観念をウシにも適用していることが良く窺われると言えるかも知れない。

ただし、ウシの再生が論じられるのは、ほとんどこのような場合に限られていると言ってよい。つまり、ある雌ウシの産んだ仔ウシが続けて死ぬと、その結果を前提として、そんな事が起きたのは、その雌ウシに再来した先祖の雌ウシが「印付きの者」

であったからだと判断されるというわけである。すべての個人が生後間も無く正しく祖霊名を与えられなければならないとされるヒトの場合 [小馬 1982, 1987] に比べ、ウシに関する再生の観念は曖昧であり、断片的である。

キプシギスの人々は、ウシの系譜関係に強い関心を持っているし、その的確な記憶が、ウシの貸借関係のもつれを原因とする場合を初めとして、ウシの所有権や支払いをめぐる近隣裁判で有力な状況証拠として採用されている。しかしながら、ウシの系譜関係はあくまでも個別具体的に、いわば一回限りの現象として記憶されているのであって、彼等がウシの系譜関係に何らかの法則性を見出しているというのでは決してない。それは、これまで検討して来た通り、キプシギスの人々が獣の類的個性に関わる *iitoondo* という概念を、例えば色彩などに狭く限定せず、i~vi に分類できるような、必ずしも相互に排他的ではない諸レベルの特徴の総体として包括的に設定していること、またその全プールから唯一の *iitoondo* を選び出して、それを個体名付与のベースとして用いていることと深く関わっていると考えられる。

このような検討を経ると、キプシギスの *iitoondo* 概念をまず実証的に記述分析することなしに、いきなり「色模様」や“colour-pattern”あるいは角の形態などの概念を用いて、キプシギスのウシおよびヤギ・ヒツジの個体への言及法や命名法を論じることが如何に不用意であるかは、すでに明らかなはずである。しかしながら、*iitoondo* が、相互に非排他的な特徴群を同一次元で並列的に把握した概念であるならば、特定の個体の諸次元にわたる諸々の特徴のうち、所有者が特にどの特徴に注目してそれを個体を代表する *iitoondo* として認め、個体名付与のベースとするのだろうか。それに関して、一定の基準は何処にも存在しないということなのだろうか。言い換えれば、果して、ある時点での一つの牛群（あるいは一つのヤギ・ヒツジの群）という小宇宙の特殊個別的状況における、主観的で相対的な個体の示差性と、それがもたらす管理の効率性のみが、個体言及と個体名付与の基礎を成しているのだろうか。

この疑問に答えるには、一つの牛群、または一人の所有者に関わるウシ全体で、各個体がどのように個体名を付与されているかを実際に検討しなければならない。それが次章の課題である。

4. ウシ、ヤギ・ヒツジの個体言及と個体名

前章で取り上げたウシやヤギ・ヒツジの *iitoondo* に関する資料は、筆者が1979年以来、6次24カ月余りの現地調査で書き溜めたフィールド・ノートから拾い集めたもの

である。筆者は、ここまでは、それらをキプシギスの人々に広く受け入れられた標準的な分類として、いわば静態的なタイポロジーとして取り扱ったに過ぎなかった。

ところで、太田至は、トゥルカナの人々がどのように家畜に個体名を付与しているかを考察した論文の中で、次のように述べている。「個体名を分解して、それを構成している語彙を分析するために、…私は家畜の個体名を聞き込んだ際に、各個体名に含まれている語彙をもとになった語彙にさかのぼって質問し、ひとつひとつの個体名の意味を調査した」[太田 1987b: 789]。一方、筆者の現地調査は、太田のように生態学的な関心を第一義的な焦点とするものではない。それゆえ、筆者が今ここで利用できる資料もまた、決して太田が行ったような精査を経たものではない。従って、本章の貢献もまた限定的なものとならざるを得ないだろう。

太田は、調査対象となる家畜群をヤギ2群、ウシ2群、ラクダ3群、ロバ2群に限定し、その全数である「合計350頭（ヤギ190、ウシ58、ラクダ70、ロバ32）の家畜についてその個体名を記録して、名前のもつ意味、命名の理由を聞きこんだ」[太田 1987b: 788]。一方、筆者がキプシギスについて太田に匹敵するような統計資料を提供することは不可能である。

筆者は、第3次（1983年11月～1984年3月）および第4次（1984年7月～同年10月）の調査では、キプシギスの家畜の貸借制度についての論文 [小馬 1985] のために統計的な資料も収集した。それは、幾人かの人物が、他人から預ったものを含めて自家に保有している家畜と、他人に預託している家畜の全部について詳細な記録をとった資料である。この資料のうち、個体名を付与するに足る成熟段階に達したウシの全個体の名称が記録してある14の世帯の事例を取りあげ、ある個体の諸々の特徴の一つがどのようにして個体名付与のベースとなる *iitoondo* として選択されるかを考察する本章の基礎資料として用いることにする。

キプシギスでは、ヤギ・ヒツジ (*artet*) は、「貧者のウシ」[PERISTIANY 1939: 154] と見なされており、彼等に認められる諸価値は、ウシに比べるとずっと小さい。また、前章で見た通り、ヤギ・ヒツジの *iitoondo* 総体はウシのものよりも数が少なく、やや単純であるばかりでなく、ほぼその部分集合を成していると見て差し支えがない。従って、本章でヤギ・ヒツジの統計資料を提出しないことが決定的な制約とはならないと考えてよいであろう。

1) ウシの個体名付与の一般的傾向

ここで取りあげるウシの総数は14群141頭であり、太田の資料（2群58頭）と比べ

表9 同一牛群および同一人物の所有するウシの全個体名

範疇	雌 (iywoget)			去勢雄 (eito)			種雄 (kirgit)
	自家保有	借入	貸出	自家保有	借入	貸出	
I	A13, B16, C49	—	—	A1'-a, B22'	—	—	—
II	A7, A13, B32, C34	—	—	—	—	—	—
III	A5, A13, C39, D65	—	—	—	—	—	—
IV	B17, C44, D65, E70	C46 ⑦Chepkorir	B29 ④Chebiso	—	—	—	—
V	A5, A6, A9, A11, B16, B20, B22, B27, B32, C42	—	—	A9'-a, A12', B15' ⑤Merebun	—	—	A13'
VI	A7, A13, B15, [B22], B32, ⊕D60, [D65] ⑥Easter	[D65]	[B22]	A13', E66', ⊕Kage	A1'-a, [B22']	—	⊕[B22]
VII	C33, [C44], D65	[B22]	C40, [C44]	C43'	A7', B15' ⑧Jonathan	—	—
VIII	B16, B17, [B22], B23, C39, C42, C44, C49, C49, D61, F80, ⊕Iwaso, ⊖Chepkechei	B20 ⊕Chebomet	—	—	—	F83' ⊙Sumuni	—
IX	A13, B15, B20, C44, F81	—	A5	A12', B15'	A7', E66'	—	B15'
X	B20, C42, F80	A7	—	B15'	—	—	B23'
XI	[A13], B16, [C44], [C44], E68	—	[A13]	A4', [B22'], [B22']	—	—	—
XII	C44, D60, E70	—	A8, A13, B17	—	—	—	—
XIII	A7, A12, A13, B31, C50, D63, G85, ⊗Chemwach	B32	A2, B17, ⊕B19'	—	—	—	—
XIV	A6, B23, C33, C34	A5, A10, C44, C47	A4, A9, B16	A7', [A13'], ⊙[A13'], [B16'] ⊗[B16'](Kibusien nebirir), B32'	—	—	A6', [B16']

凡例
 A (1~14')…単一の体色に関する *iitoondo* (表2参照)
 B (15~32'-a)…色模様に関する *iitoondo* (表3参照)
 C (33~52')…身体の一部に現われる特徴的な色模様に関する *iitoondo* (表4参照)
 D (53~65')…角の形態に関する *iitoondo* (表5参照)

E (66~79'')…体の特徴に関する *iitoondo* (表6参照)

F (80~83')…性格に関する *iitoondo* (表7参照)

G (84~88)…生活史に関する *iitoondo* (表8参照)

[]…同一牛群中または同一人物の所有するウシの中の同名の個体

⑦~⑩…参照符号

でも小さくない。ただ、筆者は、太田のごとく個体名付与の根拠を精査していないため、数頭については、個体名の意味あるいは個体名付与の根拠を必ずしも正確に示すことができない。いずれにせよ、まずこの141頭の個体名を表9に示してみよう。

表9のそれぞれの番号は、表2～表8の番号と対応しており、表2～表8を用いてその個体名を読み取ることができるようにしてある。各番号の直前に付したA～Gの記号は、表9の凡例に示した通り、分析的な特徴から7群に大別し（表2～表8に示し）た *iitoondo* と個体名の各群を表している。表9の内容を統計としてまとめた参考資料が表10である。

本章では、前章まで採用して来た *twoteiwot* (経産雌), *iywoget* (多産雌), *cherakanet* (老雌) というキブシギスの民俗概念を一旦解除して、そのすべて、すなわち個体名を付与されるまでに成熟した雌ウシを、論究上の便宜から「経産雌」と呼ぶことにする。表10で、経産雌および去勢雄の借入・貸出状況を見ると、それぞれが12:16, 7:2となっており、アンバランスであるように思える。だから、提供された資料が、借入と貸出が均衡するのに必要な規模を持たず、それゆえに十分な一般性を有しないと見えるかも知れない。だが、借入されたウシ全数と貸出されたウシ全数の比は19:18と均衡的である。この事実は、ここに提出された資料が少くともある程度の一般性を持っていることを証していると考えられる。

表10 同一牛群および同一人物の所有するウシの個体名

範疇	経 産 雌			去 勢 雄			種 雄	計
	自家保有	借 入	貸 出	自家保有	借 入	貸 出	自家保有	
I	3	0	0	2	0	0	0	5
II	4	0	0	0	0	0	0	4
III	4	0	0	0	0	0	0	4
IV	4	2	2	0	0	0	0	8
V	10	0	0	4	0	0	1	15
VI	8	1	1	3	2	0	1	16
VII	3	1	2	1	3	0	0	10
VIII	12	2	0	0	0	2	0	16
IX	5	0	1	2	2	0	1	10
X	3	1	0	1	0	0	1	6
XI	5	0	1	3	0	0	0	9
XII	3	0	3	0	0	0	0	6
XIII	8	1	3	0	0	0	0	12
XIV	4	4	3	6	0	0	2	19
計	76	12	16	22	7	2	6	141

表9を概観すると、幾つかの個体名が頻出することに気付く。そこで、前章で取りあげた163の個体名の各々が、表9に具体的にどのような頻度で出現しているかを示したのが表11である。

表11によると、A13 (*tuiyai*) および C44 (*birimet*) が各9例、B22 (*kebei*) が7例、B15' (*maridadi*) および D65 (*karoi*) が各5例などとなっている。これらが特に出現頻

表11 ウシの個体名の出現頻度 (A~G…表9凡例を参照せよ)

a. <経産雌>

個体名	個体数	個体名	個体数	個体名	個体数
A 1	—	32	3	E 66	1
2	1	C 33	2	67	—
3	—	34	2	68	—
4	1	35	—	69	—
5	4	36	—	69-a	—
6	2	37	—	70	2
7	4	38	—	70-a	—
8	1	39	2	72	—
9	2	40	1	73	—
10	1	41	—	74	—
11	1	42	3	75	—
12	1	43	—	76	—
13	9	44	9	77	—
13-a	—	45	—	F 80	2
14	—	46	1	81	1
B 15	2	47	1	82	—
16	5	48	—	83	—
17	4	49	2	G 84	—
18	—	50	1	85	—
19	—	51	—	86	—
20	4	52	—	86-a	—
21	—	D 53	—	87	—
22	7	54	—	計 86	計96
23	2	55	—		
24	—	56	—		
25	—	57	—		
26	—	59	—		
27	1	60	2		
28	—	61	1		
29	1	63	1		
30	—	64	—		
31	1	65	5		

b. <去勢雄・種雄>

個体名	個体数	個体名	個体数	個体名	個体数
A 1'	—	31'	—	71'	—
1'-a	2	32'	1	72'	—
2'	—	32'-a	—	73'	—
3'	—	C 33'	—	74'	—
4'	—	34'	—	75'	—
6'	1	35'	—	76'	—
7'	3	39'	—	77'	—
8'	—	40'	—	F 81'	—
8'-a	—	43'	1	82'	—
8'-b	—	45'	—	83'	1
9'	—	46'	—	G 85'	1
9'-a	1	47'	—	計 77	計33
10'	1	49'	—		
12'	2	50'	—		
13'	4	D 53'	—		
13'-a	—	54'	—		
14'	—	55'	—		
B 15'	5	56'	—		
16'	3	57'	—		
17'	—	58'	—		
18'	—	59'	—		
19'	1	60'	—		
20'	—	61'	—		
21'	—	62'	—		
22'	3	63'	—		
23'	1	64'	—		
24'	—	65'	—		
25'	—	E 66'	2		
26'	—	67'	—		
27'	—	68'	—		
28'	—	69'	—		
29'	—	69'-a	—		
30'	—	70'	—		

度の高い個体名であるが、反面、一個体にだけしか用いられていない個体名や、全く出現していない個体名が随分多いことも判る。

前章で取りあげられた *iitoondo* と個体名のうち幾つが表9に出現しているかを各群ごとにまとめたのが表12である。表12によると、経産雌 (0.45) の個体名の方が去勢雄・種雄 (0.34) よりも高い割合で出現している。また類別群では、経産雌でも去勢雄・種雄でも、A群(単一の体色にちなむ個体名) および F群(性格にちなむ個体名) が高率である。D群(角の形態に関する個体名) の出現率は、経産雌では全体の平均値にほぼ等しいものの、去勢雄・種雄では低い。なお、表9に現れている個体名数は、全個体名数の34パーセントに過ぎない。

c. <ウシ全体>

	<i>iitoondo</i>	個体数	<i>iitoondo</i>	個体数	<i>iitoondo</i>	個体数	
A	1	—	29	1	60	2	
	1-a	2	30	—	61	1	
	2	1	31	1	62	—	
	3	—	32	4	63	1	
	4	1	32-a	—	64	—	
	5	4	C	33	2	65	5
	6	3		34	2	E	66
	7	7	35	—	67	—	
	8	1	36	—	68	—	
	8-a	—	37	—	69	—	
	8-b	—	38	—	69-a	—	
	9	2	39	2	70	2	
	10	2	40	1	70-a	—	
	11	1	41	1	71	—	
12	3	42	3	72	—		
13	13	43	1	73	—		
13-a	—	44	9	74	—		
14	—	45	—	75	—		
B	15	7	46	1	76	—	
	16	8	47	1	77	—	
	17	4	48	—	F	80	2
	18	—	49	2	81	1	
	19	1	50	1	82	—	
	20	4	51	—	83	1	
	21	—	52	—	G	84	—
	22	10	D	53	—	85	1
	23	3		54	—	86	—
	24	—	55	—	86-a	—	
	25	—	56	—	87	—	
	26	—	57	—			
	27	1	58	—	計	92	計129
	28	—	59	—			

雄・種雄でも、A群(単一の体色にちなむ個体名) および F群(性格にちなむ個体名) が高率である。D群(角の形態に関する個体名) の出現率は、経産雌では全体の平均値にほぼ等しいものの、去勢雄・種雄では低い。なお、表9に現れている個体名数は、全個体名数の34パーセントに過ぎない。

次いで、表13に、個体名一つ当りのウシの個体数を群別で示してある。全体の平均値は、0.79頭となり、A, B, Cの各群の値がこれよりも大きい。ただし、C群についてみると、経産雌では1.20の値を示すものの、去勢雄・種雄では0.09と極端に小さい。ちなみに、表12を参照すると、C群は、去勢雄・種雄の場合、用いられた個体名の比率が0.09に過ぎない。これらの事実は、個体名の選択に関して、身体の一部に現われる特徴的な色模様にちなむ個体名が、経産雌ではA群・D群の個体名と共に重要であるのに反して、去勢雄・種雄ではほとんど無視されていることを示している。

かって、キプシギスの牛群には、実に多くの去勢雄が含まれていた。それは、牛群の大きさが個人の社会的権威

表12 ウシの *iitoondo* と個体名の出現率

<i>iitoondo</i> 群		A	B	C	D	E	F	G	計
経産雌	(α) 個体名数	15	18	20	11	13	4	5	86
	(β) 出現した個体名数	11	10	10	4	2	2	0	39
	β/α	0.73	0.56	0.50	0.36	0.15	0.50	0.00	0.45
去勢雄	(α) 個体名数	17	19	11	13	13	3	1	77
	(β) 出現した個体名数	7	6	1	0	2	1	1	18
	β/α	0.41	0.31	0.09	0.00	0.15	0.33	1.00	0.23
合計	(α) <i>iitoondo</i> 数	32	37	31	24	26	7	6	163
	(β) 出現した <i>iitoondo</i> 数	18	16	11	4	4	3	1	56
	β/α	0.56	0.43	0.35	0.17	0.15	0.43	0.17	0.34

表13 ウシの個体名一つ当りの個体数 (A~G...表9凡例を参照せよ)

<i>iitoondo</i> 群		A	B	C	D	E	F	G	計
経産雌	(α) 個体名数	15	18	20	11	13	4	5	86
	(β) 個体数	27	30	24	9	3	3	0	96
	β/α	1.80	1.67	1.20	0.82	0.23	0.75	0.00	1.12
去勢雄	(α) 個体名数	17	19	11	13	13	3	1	77
	(β) 個体数	14	14	1	0	2	1	1	33
	β/α	0.82	0.74	0.09	0.00	0.15	0.33	1.00	0.43
合計	(α) 個体名数	32	37	31	24	26	7	6	163
	(β) 個体数	41	44	25	9	5	4	1	129
	β/α	1.28	1.19	0.81	0.38	0.19	0.57	0.17	0.79

を決定するという文化伝統のためであった [小馬 1985]。だが、今日では、牧地の効率的利用の観点から、去勢雄と種雄の数は、必要最小限に抑えられている。犁耕用の去勢雄も種付けのための種雄も友人と共用することが多い。去勢雄・種雄ではC群の個体名が極めて稀であることの一因は、一牛群中に雄獣が少ないために、A群およびB群の個体名だけで、ほぼ全雄獣を差異化できることだと考えることができるかも知れない。表13に挙げられた33頭の雄獣のうちA群かB群の個体名を持つものが28頭(84.8パーセント)に達している。

表9に現われている個体名数全体に対して各種別群が占める比率をまとめたものが表14である。表14によると、経産雌では、A, B, C群がそれぞれ全体の約四分の一を

表14 ウシの個体名の出現数と出現比率 (A~G...表9凡例を参照せよ)

範 疇		iitoondo 群							そ の 他	計	
		A	B	C	D	E	F	G			
経産雌牛 (104)	自家保有	17	21	19	8	3	3	1	4	⊕Easter, ⊕Iwaso	76
	借入	3	3	3	1	0	0	0	2	⊖Chepkechet	12
	貸出	7	6	2	0	0	0	0	1	⊗Chemwach ⊗Chepkorir ⊕Chebomet, ⊕Chebiso	16
	小計 (比率, %)	27 (26.0)	30 (28.9)	24 (23.0)	9 (8.6)	3 (2.9)	3 (2.9)	1 (1.0)	7 (6.7)		104 (100.0)
去勢雄 (31)	自家保有	9	9	1	0	1	0	0	2	⊕Merebun, ⊕Kage	22
	借入	3	2	0	0	1	0	0	1	⊗Jonathan	7
	貸出	0	0	0	0	0	1	0	1	⊖Sumuni	2
	小計 (比率, %)	12 (38.7)	11 (35.5)	1 (3.2)	0 (0)	2 (6.5)	1 (3.2)	0 (0)	4 (12.9)		31 (100.0)
種雄 (6)	自家保有=合計 (比率, %)	2 (33.3)	4 (66.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		6 (100.0)	
合 計		41 (29.1)	45 (31.9)	25 (17.7)	9 (6.4)	4 (3.5)	4 (2.8)	1 (0.7)	11 (14.0)		141 (100.0)

占める。だが、C群は雄獣に関しては重要でないので、雌獣と雄獣を合せると出現数の17.7パーセントに過ぎなくなり、A群(29.1パーセント)、B群(31.9パーセント)に比べ劣位にある。

雌獣・雄獣を合計すると、A群およびB群、すなわち身体全体の色彩と模様になむ個体名が全個体の個体名に占める率は61パーセントにおよぶ。さらに、身体の一部に現われる色模様になむ個体名であるC群をこれに加えれば、78.7パーセントに達する。一言で言えば、ウシの個体名の五分の四近くまでが、色模様によって決定されているわけである。

ここまで本章の検討を進めて来ると、前章末尾に示した命名に関する疑議が必ずしも具体的な根拠を持ち得ないのではないかと予想することができそうである。

2) 同一牛群における個体名の重複をめぐって

再び表9に立ち戻って、個体名の重複を調べてみよう。太田は、トウルカナについて、「調査対象とした全350頭の中で個体名は合計290種類出現し、そのうち245個(84.5%)は、ただ一頭だけに命名されていた。3頭以上で重複していた個体名は、わずか9個(31.4%)に過ぎない」[太田 1987b: 804-805]と言う。しかも、「所属群の違いを無視したことによって、3頭以上で重複した個体数の観察値が大きくなったの

だと思われる」[1987b: 865]とし、「所属群や家畜種間の相違を無視しても個体名の重複は少ない」[1987b: 804]と述べる。

表11を参照すると、キプシギスの場合、3頭以上の個体で重複している個体名は、経産雌の場合が11.6パーセント(10/86)、去勢雄・種雄の場合は6.5パーセント(5/77)、両方合わせると9.2パーセント(15/163)である。もし性差を無視して、それを示す示差的な接頭辞の対立——つまり、che[-p](f): ki[-p](m)、あるいは che[-p](f): φ(m)、φ(f): ki[-p](m)などの対立——を除いた *iitoondo* を考えてみると(表11, C), 3頭以上の個体で *iitoondo* が重複しているのは、17.4パーセント(16/92)である。この数値をトゥルカナと比較すると、所属する牛群を無視した場合、キプシギスでは個体名または *iitoondo* が重複して命名に用いられる割合がかなり大きいことが判る。さらに、筆者の資料にはヤギ・ヒツジやラクダの資料が含まれていないことや、調査対象の数値の差(トゥルカナ…個体数350, 個体数290: キプシギス…個体数129, 個体数163, *iitoondo* 数92)を勘案すれば、その傾向の差がここに示されたパーセンテージの差以上に大きいと考えなければならない。

こうした差異を生み出している原因として、キプシギスの家畜群の規模がトゥルカナに比べて小さいこと、キプシギスでは個体名を付与されるのがかなり成熟した個体であることなどが考えられるが、資料的な制約から十分に論究することはできない。

いずれにせよ、家畜の管理という技術的な側面からすれば、より重要なのは、ある地域における家畜のある種または家畜全体についての個体名の重複よりも、むしろ個々の家畜群における個体名の重複状況を検討することである。

表9を見ると、個体名の重複が生じているのは、VI, VII, XI, および XIV の4世帯の8例である。世帯 VII の場合、2頭の C44 (*birimet*) のうち1頭は貸出されており、自家の牛群中にはいないので、牛群を管理する上での混乱は、貸出中の1頭を連れ戻さなければ生じ得ない。

次に、世帯 VI の場合はどうか。まず3頭の B22 (*kebei*) および1頭の B22' (*olbas*) について検討しよう。種雄である⊕が、雄ウシの個体名である B22' ではなく経産雌の個体名であるはずの B22 を付与されているのが奇異であろう。その理由は、個体言及上、⊕と他の2頭の B22 (経産雌) との区別よりも、⊕ともう1頭の同じ *iitoondo* の雄ウシである B22' (去勢雄) との区別の方がもっと重要だったからである。つまり⊕B22 (種雄) は、それだけが群の他のウシ達と区別して管理される機会が少くないのである。また2頭の B22 (経産雌) のうち一頭は貸出されていて自家の牛群中にはいないので、必ずしもこの2頭の個体名を区別する必要が無いのは、世帯 VII の場

合と全く同様である。さらに、⊕B22 は、“kebei” という個体名ではなく、普通は単に「種雄」(*kirgit*) と呼ばれているので、自家にいる B22, ⊙B22, B22' の 3 頭が世帯員によって個体言及上混同されることは無いと言う。

世帯 IV は、1975年の早魃がひどくなった時に、牧草不足に苦しんでいた同氏族員に依頼され、緊急避難として彼の 5 頭の雌ウシを預って飼養した。しばらく後に遅れていた雨季が始まり、牧草が伸び始めたので、同氏族員は 4 頭の雌ウシを自家へ連れ戻した。だが、彼はキプシギスの伝統に従って、感謝の印として 1 頭の雌ウシを残した。その雌ウシの乳を世帯 IV が今でも利用している [小馬 1985: 39 (事例 7)]。これが D65 (*karoi*) の 1 頭である。それゆえ、IV の世帯員には、この D65 は何時でも連れ戻されるべき預かり物として観念されている。言及上、2 頭の D65 を区別する必要があるれば、「ローンのウシ」を意味する“*kimanakai*”の語を用いて、「ローンであるウシ *karoi*」(*karoitap kimanakai*) と呼べる。また、自家の D65 が、グレード・カウ (*grade cow*) とも通称される西洋混血種 (*nusut*) であり、他方、預っている D65 が西洋混血種と土着牛との混血種 (*roboiyot*) である [小馬 1985: 39 (事例 7)] ことから、両者を“*keroitap nusut*” および“*keroitap roboiyot*” と区別することも容易であると言う。

世帯 XIV の 3 頭の B16' (*kibusien*) については、世帯 VI の B22 の場合と同様、種雄が通常は単に「種雄」(*kirgit*) と呼ばれているので、他の 2 頭との混乱は生じない。一方、2 頭の B16' の去勢雄は、言及上の区別をしなければ、管理上の不都合が生じる。*busion* という *uitoondo* は、表 3 に示した通り、全身が茶と黒または茶と白のブチであることだ。世帯 XIV の 2 頭の去勢雄は茶と白のブチであるが、⊙B16' の方の茶は赤 (*birir*) に近い。そこで ⊙B16' は [*kibusien*] *nebirir* (赤い *kibusien*) と呼ばれている。同様に、2 頭の A13' (*james*) も言及上の区別を設けなければ、管理上の不都合が生じ得る。この 2 頭は *tui* (黒あるいは青) という *uitoondo* のウシであるが、1 頭は頭部が特に黒いので、世帯員はこの去勢雄を *kiptuimet* ([33]) と呼んでもいる。

最後に、世帯 XI の事例を検討しておこう。世帯 XI が自家保有している 5 頭の経産雌のうち 2 頭が C44 (*birirmet*)、また自家保有している去勢雄のうち 2 頭が B22' (*olbas*)、さらには、自家に保有している経産雌 1 頭と貸出中の経産雌が A13 (*tuiyai*) となっており、個体名の重複率が異常に高い。しかも、A13 の例を別にして、他 2 例ではどちらも同じ範疇の個体間で重複が生じている以上、例えば世帯 XIV が去勢雄に関する 2 つの重複例の解決のために行ったように、何らかの仕方で個体名を変異化しなければ、管理上不都合であると考えられる。

ところが、残念ながら、世帯 XI の調査では、筆者は、この点まで踏み込んで精査していない。しかしながら、やはり世帯 XI でも世帯 XIV のような対処法をとっていると推定するのが妥当である。恐らく、インフォーマント XI は、筆者からウシ達の *iitoondo* (個体名) が何かと尋ねられた時に、それぞれのウシの個体名 (*iitoondo*) として最終的に採用された *iitoondo* を告げたのではなく、筆者が個々のウシのイメージ (*iitoondo*) を脳理に思い描くことを容易にしようとして、叙述的に *iitoondo* を選んだのである。当時、筆者は、この *iitoondo* 概念の微妙な使い分けに気付いておらず、即座に適切な問を追加することができる程良く問題を整理できていなかったのである。

この事実は、筆者の調査の不首尾・不徹底を如実に物語っている。とはいえ、この失敗が、キプシギスの *iitoondo* 概念の多重的性格を教えてくれていることも見逃すべきではない。インフォーマント XIV は、①A13' が *james* とも *kiptuimet* とも呼ばれていることを、また ②B16' をまず *kibusien* と叙述してからすぐに [*kibusien*] *nebirir* とも呼んでいると、間わず語りに教えてくれた。その理由は、あるウシの個体名のベースとして世帯員が採用している *iitoondo* と、世帯員以外の者が初めてそのウシを見て、彼がその個体言及のベースとして認識するであろう *iitoondo* とが必ずしも一致しない場合がままあることを、さらにその食い違いがコミュニケーションの混乱を招きかねないことを、インフォーマント XIV 自身が良く認識しているからである。インフォーマント XI もまた、同様の認識から、親切にもウシの *iitoondo* を叙述してくれたのだと解するのが自然である。

ハンティングフォードは、あらゆる点でキプシギスとの文化・社会的な同一性が著しいナンディのウシの個体名について記録を残している。彼は、ナンディの人々がウシの個体名を選ぶ基準として、(1)角の形態、(2)体色、(3)身体の特異的な形態を挙げたうえで、次のように言う。「牛達は、これらの諸点のいずれかに因んで名を付けられる——そして人間もまた同様というわけな——のだが、必ずしも西欧人にとって最も目覚ましいと思われる点にちなむというわけではない」[HUNTINGFORD 1950: 43]。この言明を例証するために彼が引いているのは、双方の角が下向きに生えている雌ウシ (*Chepseta*[-*n*]) が、*Tepes* (*Tepes-met* の略つまり、真直に両脇に突き出た大きな角を持つ雄ウシ) と呼ばれている例と、逆に *Tepes*[-*met*] と呼ばれてしかるべき雌ウシが *Lelmet* (頭部が白いウシ) と呼ばれている例である [HUNTINGFORD 1950: 43]。

ハンティングフォードが抱いた感懐は、ナンディやキプシギスを初めとするカレンジン語系諸民族の間で参与観察を行った民族誌学者が、何時か等しく覚えるものではあるまいかとさえ思われる。しかしながら、実際に仔細に観察してみると、社会に広

く標準として共有された記述的な *iitoondo* を全く無視して、牛の管理単位である世帯が自由に個体名を選択できると考えるのはやはり不適切であることが判る。

世帯 VI が、先に述べたように、種ウシ⊕を性を無視してまで B22' ではなく B22 と名付けているのも、当該の4頭のウシが共通に持つ標準的な *iitoondo* を無視しない形で4頭を首尾良く差異化するためのギリギリの努力の結果である。世帯 XIV の3頭の B16' と2頭の A13' の例もまた、全く同様の試みであると解するのが妥当である。個体名の付与において、標準的 *iitoondo* が性別以上に重視されるのは、やはり獣の管理上の視点からである。遠方からウシを見ている場合でも、標準的な *iitoondo* は容易に識別できるものが多い——特に、A群、B群の個体名は、その傾向が著しい。これに反して、遠方からウシの性別を判別することは容易ではない。また、世帯 VI の⊕B22 や、世帯 XIV の3頭の B16' のうちの種雄が、世帯員間では単に種雄 (*kirgit*) と呼ばれているように、同じ個体名を持つ複数のウシの性と属性を個体名以外の言及方法で言い分けることも可能だからである。

人間の言語コミュニケーションの最大の特徴は二重分節にある。分節する (*articulate*) とは、ある部分をそれ以外の部分から切り離すことであるが、それは、同時に取りも直さず、切り離された部分を一括りにすることでもある。名付けの行為もまた、人間の言語コミュニケーションの一つとして、全く同じ性格を持っている。名辞は、名指されたものを他から差異化するが、同時に、名指された内容を一括し、類化する。名辞は、差異性によって個を指示すると同時に、記号性によって類と繋がり、意味を社会的に共有しなければならない。キプシギスやナンディのウシの個体名のあり方が背負い込んでいるのもまた、この差異化と記号化の二律背反なのである。

事情をさらに込みいらせているのは、キプシギス社会の伝統的な構造原理の一つである個人間におけるウシの長期貸借制度が、実施細則を変えながら現在も脈々と生き続けている事実 [小馬 1985] である。この慣行のために、世帯 VI のように、自家に保有しているウシ達と同じ *iitoondo* のウシが突然牛群に加わり、不特定期間自家のウシと共に飼養される事態が何時でも生じ得る。すると、名付けのコミュニケーションにおける差異化 (特に世帯員間で強い要請) と記号化 (特に対社会的に強い要請) の二律背反がすでに預かり手の世帯ばかりでなく預け手の世帯でも生じている以上、ウシが貸借された場合、この二律背反は預かり手の世帯において二重化されることになる。

ウシの長期貸借制度は、キプシギスの民族史を通じて、社会を構造化する機能を担って来たばかりでなく、同時に逆機能として、ウシの所有権をめぐる最も深刻な紛争の

発生源でもあり続けて来たのである。その紛争を取り扱う近隣裁判では、ウシの系譜的記憶と生活史に関わる証言とが最も重要な証拠となる。従って、預かり手の所帯員には個体名あるいは個体への言及の仕方の差異化によって管理を効率的にする要請があるとしても、預け手には所有権を保全するという要請があるために、個体名や個体への言及の仕方をたやすく変えられないという矛盾が生じることになる。先述のように、世帯 VI の 2 頭の B22, 世帯 VII の 2 頭の C44, 世帯 XI の 2 頭の A13 の場合、いずれも個体名の副次的差異化がなされておらず、単に「ローンのウシ(である)」という形容詞句による区別が必要に応じて行われているだけであるのは、このような事情によるものである。

3) 個体言及の諸レベル

太田は、トゥルカナについて、「個体名は、命名対象が持つ何らかの属性に基づいて命名されるのであるから、語彙をまったく自由に選択しようというわけではない」[太田 1987b: 805] し、また、「同じ群の中では、個体名の重複を避けねばならないという条件も命名の自由を拘束する」[太田 1987b: 805] と述べている。キプシギスについても、家畜管理上の同様な要請によって、個体名付与に関する基本的な条件は同じであると考えてよい。

太田は、トゥルカナが家畜個体に言及する方法に三つのレベルを区別している。第一は、搾乳時に呼びかけて制御するなどの目的から、「経産メスに対して与えられた呼称が、その個体に言及するための名称として転用され」たもので、「命名するというはっきりとした意図をもって付与された個体名である」[1987b: 809]。第二は、「限定された集団内で特定個体への記述的な言及法が、……固有名詞化したものである」[1987b: 809]。この場合、沢山の指示可能な語彙の中から、「ある特定の語彙が選択的に個体と結合し、その語彙が個体の特徴自体ではなく個体自身を指示するという性格をもつ」[1987b: 809]。第三は、「個体の外見的特徴を記述的に表現する方法であり、これは個体名ではない」[1987b: 809]。

この三つのレベルの弁別は、個体への言及という言語コミュニケーションの特性を的確に把握しており、重要である。換言すると、太田は、家畜個体に言及する言語コミュニケーションを、(1)日常的な家畜管理単位としての世帯の成員と家畜個体との間、(2)世帯員間、(3)世帯員と非世帯員の間、の三つのレベルに分類し、この各レベルにおける家畜個体への言及が持つ特性を述べているのである。

太田は、第三レベルの個体言及法が見られる例として、家畜が迷子になった場合

を挙げている [1987b: 809]。キプシギスでは、さらに、家畜が盗難や略奪にあった場合、結婚式に先立つ「牛見儀礼」で婚資として支払うウシを取り決める場合、家畜の長期貸借を実施する場合、さらには、家畜の所有権をめぐる紛争を取り扱う近隣裁判の審理など、ウシを媒介とするあらゆる種類の社会契約の提結と、破綻した社会契約の回復とに関与する言語コミュニケーションの場で、このレベルでの個体言及法が不可欠のものとなっている。その一端は、すでに前節で垣間見た通りである。なお、この場合には、必要に応じて、一個体の複数の *iitoondo* に言及されることになる。

第二のレベルはどうであろうか。前章末尾で指摘した通り、キプシギスの *iitoondo* 概念は、確かに、個体の次元を異にする様々な特性をあくまでも並列的に包摂しているという特徴を示しているけれども、だからといって、家畜の管理単位である世帯が、その次元並列的特徴に依存し、管理上の効率性を優先するべく任意の *iitoondo* を個体名付与のベースとして選び出しているわけではない。表9に記された事例の分析を通して明らかにした通り、「個体名は他個体との重複を避けて命名される」[太田 1987b: 803] はずだという管理上の要請をある程度まで抑えてでも、標準的な *iitoondo* を出来る限り活かして個体名を決定する試みが強く実行されているのである。

次に、第一のレベルを見よう。表9に現れた個体名のうち、世帯IVの㊸ *chepkorir* および世帯VIIの㊹ *jonathan* が、このレベルの個体言及の例である——なお、㊴, ㊵, ㊶, ㊷, ㊸は、ここでは命名理由不明としておこう。今日では、例えば、命名年齢に達する前の若い去勢雄に *kijana* (スワヒリ語で「若者」の意味), *chenea* (英語の *junior* が語源), あるいは *toto* (スワヒリ語で子供を意味する *mtoto* が語源) などのニックネームを付けるばかりでなく、*Jonathan* (英国人名), *Njoroge* (キクユ人名) など、様々な種類の個人名を与えることが、まま行われている。同様に若い雌ウシには、女性の個人名が与えられることがある。これには、そのウシの世話をする子供がニックネームとして与えたものが、世帯員間の通称になった場合と、子供が自分が世話するウシを「自分のウシ」と見なすことから、その子供の名前が当該のウシの個体名として世帯員間で認知されている場合とがある。世帯IVの㊸ *chepkorir* は、後者の好例である——なお、*chepkorir* は、キプシギスの典型的な女性幼名(「粥名」)の一つである。しかも、この場合、ウシが通常の命名年齢に達した時に、幼時の通り名がそのまま個体名になってしまったのである。

今後、果して、第一のレベルの個体言及が、一層一般化して行くのであろうか。万一そうなった場合には、これまで詳しく論じた社会慣行はどのような変容を遂げるのであろうか。興味あるテーマである。

おわりに

冒頭で述べた通り、本稿の目的はささやかなものである。そして、筆者が社会人類学徒であり、フィールドワークの関心の中心が生態学的なテーマにはないことから、筆者が本稿の基礎資料として用いたものには、大きな資料的な限界があった。その限界にもかかわらず、家畜の管理と個体言及に関して、比較研究のための小さな材料を提示するという所期の目的が、幾分なりとも実現していることを祈りたい。加えて、本稿が、世帯や家族による家畜管理という狭い枠組を超えて、民族社会をネットワークする広域的な社会慣行が家畜の個体言及に及ぼす影響にも注意を喚起し得ているとすれば幸いである。

文 献

- HOLLIS, A. C.
1909 *The Nandi: Their Language and Folk-lore*. Oxford: Clarendon Press.
- HUNTINGFORD, G. W. B.
1950 *Nandi: Work and Culture*. London: His Majesty's Stationery Office for the Colonial Office.
- 小馬 徹
1982 「キプシギス族の“再受肉” 観再考」『社会人類学年報』8: 149-160。
1983 「牛牧民カレンジン——部族形成と国民国家」『季刊民族学』25: 32-45。
1985 「東アフリカの“牛複合” 社会の近代化と牛の価値の変化——キプシギスの“家畜貸借制度” (*kimanakta-kimanagan*) の歴史的变化と今日的意義をめぐって」『アフリカ研究』27: 1-54。
1987 「キプシギスの“火”のシンボリズム」和田正平編『アフリカ 民族学的研究』同朋舎出版, pp. 3-48。
- KOMMA, T.
1981 *The Dwelling and Its Symbolism among the Kipsigis*. In N. Nagashima (ed.), *Themes in Socio-cultural Ideas and Behaviour among the Six Ethnic Groups of Kenya: the Visukha, the Iteso, the Gusii, the Kipsigis, the Luo, and the Kamba*, Tokyo: Hitotsubashi University, pp. 91-123.
- MASSAM, J. A.
1968 (1927) *The Cliff Dwellers of Kenya*. London: Frank Cass and Company.
- 太田 至
1987a 「トゥルカナ族の家畜分類とそれにもなうハズバンドリーの諸相」和田正平編『アフリカ 民族学的研究』同朋舎出版, pp. 731-769。
1987b 「家畜の個体名は、いかに付与されるか——北ケニアの牧畜トゥルカナ族の事例より」和田正平編『アフリカ 民族学的研究』同朋舎出版, pp. 787-816。
- ORCHARDSON, I. Q.
1961 *The Kipsigis*. Nairobi: East African Literature Bureau.
- PERISTIANY, J. G.
1939 *The Social Institutions of the Kipsigis*. London: Routledge and Kegan Paul.